2005年2·3月 合併号　Enfanter　No.300

あんふぁんて

Enfanterとはフランス語で
①子を産む ②(計画などを)考え出す ③(作品などを)創り出す、の意

30周年記念号

特集「あんふぁんて 私の場合」

「道標」

私が家へ帰る道を見つけて欲しい
神聖な中の、最も神聖な所へ
安らぎの時の中へ
そして、時代を超えて
真実をささやき続ける
風の中へと
入って行く道を見つけられるように

あんふぁんての歴史（Ⅰ）　ー主なことがら、集まり・イベント、会報ー

１９７５年３月～１９７９年８月（ いわば「あんふぁんて」初期 ）

1975年 3月　・高田馬場に時間託児のできる《 女たちと子どもたちの広場『みず・でっぽう』 》をオープン。
・情報誌を媒体として女たちがつながる会をレディースポイス社と幾代昌子らが企画。フランス語で出産する・創造するの意味を日本語で書いた『あんふぁんて』とネーミング。
・子どもの預け合いを提案した「子持ち女・集まれ！」などの記事が、朝日新聞・毎日新聞・産経新聞・日刊スポーツ等に掲載。テレビ神奈川・TBSラジオ等に出演。
7月　・吉祥寺の武蔵野公会堂（託児数４３名の保育つき）、銀座の『スリーポイント』で初会合。
8月　・《 私たちが創るくらしの情報誌『あんふぁんて』 》を創刊。　メインコラムは「あんふぁんての目」。
8月号・連載ドキュメント「妊娠・出産」。あんふぁんて図書館に『女のからだ』『複合汚染』を紹介。
〈「ヘルパー制」について〉の特集。
9月　・保険会社４社と交渉し、現「三井住友海上火災」と新しい「相互託児賠償責任保険」を契約。
9月号・正直レポート「おやつ」。呼吸法による出産準備クラス（いわゆるラマーズ法）の紹介。
あんふぁんて図書館に『子どもからの自立』を紹介。〈 託児係の手引き 〉の記事。
10月　・参加費月額１５０円徴収を決定。
10月号・正直レポート「ベビー休憩室」。
11月号・正直レポート「合成洗剤」。
12月　・業務代行をしていたレディースポイス社が解散し、それまでの借入金約１１３万円をカンパ。
・事務局を神楽坂の幾代宅に移動させ、居候させてもらう。
1976年 3月　・託児つきミズスクール「子どもなんて怖くない」、「恐ろしい合成洗剤」を主催。
・《 女たちが創る女たちの店『ホーキ星』 》が新宿にオープン。
3月号・〈 ひとり歩きし始めたあんふぁんて 〉の特集。
5月　・ミズスクール「母の日を考える」。
7月　・保険料捻出のためにベビー用品のアンケートを有志で請け負う。
9月　・魔女コンサート '76（杉野講堂にて）の託児協力。
10月　・参加費月額300円に値上げ。
11月号・〈 ヘルパー制・共同保育をおし進めるために 〉の特集。
12月　・あんふぁんてパーティー（タカノフードパーラー中野坂上店にて）。
1977年 2月　・子連れスキーツアー。
3月　・ミズスクール「混乱する幼児教育」。
4月号・〈 三鷹グループが町の銀行・デパート等に要望書提出 〉の記事。
5月　・魔女コンサート '77（ 日比谷野音にて ）の託児協力。
6月号・連載コラム「 男からの手紙コーナー」、〈 男の自立 〉の特集。
7月　・夏の合宿（ 伊豆エメラルドタウンにて ）
7月号・〈 働くことの研究グループから 〉の特集。
9月　・託児つき映画会『 ねむの木の詩 』（ 千駄ヶ谷区民会館にて ）。
11月　・交流会合宿（ 国立婦人教育会館にて ）。
11月号・図書コーナーに『 ハイト・リポート 』を紹介。
1978年 1月　・(旧) 国立婦人教育会館へ託児等の要望書提出。
1月号・〈 世田谷グループが行政へ働きかけたら 〉の記事。
2月　・《 新幹線にベビーコーナーを！ 》の署名集め開始。
3月号・〈 離婚を考えるグループより 〉の特集。
4月号・あんふぁんてレポート「 ゴミのはなし 」。〈 共同保育考 〉の特集。
5月　・(旧) 国鉄に署名と要望書を提出。
6月号・あんふぁんてレポート「 ベビーカー論争 」。
7月号・初めてのグループ編集のページ 。
8月　・(旧) 国鉄との会談。　8月号・〈 父母から聞いた戦争の話 〉の特集。
10月　・保険料捻出のため、井の頭公園むさしの弁天市に６グループ合同で参加。
11月号・〈 私たちが学ぼうとするとき 〉の特集。〈 ベビーフード放射線照射事件〉の緊急特集。
12月　・あんふぁんてパーティー（ 早稲田「ジョラ」にて ）。
1979年 1月号・〈 私たちと子どもと公共施設 〉の特集。
3月号・〈 集団保育って何？ 〉の特集。連載コラム「 からだのおしゃべり 」、「 たべもののはなし 」。
5月　・あんふぁんてバザー（ 井の頭公園弁天市に参加 ）。　5月号・〈 女のからだ 〉の特集。
7月　・あんふぁんてＴシャツ完成！　・子どもキャンプ（ 丹沢にて ）。
8月　・事務局が西永福の大山宅へ移動。
8月号・〈 照射ベビーフード事件その後 〉の記事。〈 松田道雄著『女と自由と愛』 〉の論争。

自立のバトンは渡したい

調布市

30年くらい前に、たまたま出会ったあんふぁんて。「預け合い」のキーワードのかげに「**女の自立、男の自立**」というのがチラチラしていたのがしっくりきました。子育ての情報だけでなく、子どもの友達だけでなく、親の友達ができることが、どんなに私の子育て期を豊かにしてくれたことか。人って、自分が面白い本や映画をみたら友人にも薦めたくなるし、バーゲンでお得なお買い物したり、おいしい物を食べたら、やっぱり知り合いに言いたくなるものです。私はあんふぁんてがえらく気に入ったので、みんなに言いふらしたくて10年くらいはしっかりと、あんふぁんてに関わっていました。もともと私がおせっかいな性格だということもあります。

インターネットというものが普及してきて、人と人とのコミュニケーションの方法もスピードも変わってしまいました。あっという間にケータイは1人1個が当たり前になって、親と子でさえもメールで会話しています。わたしゃとてもついていけない。まあ、私は便利なものに対して、理解する前にとりあえず反感を持ってしまうという、ひねくれ者ではありますが。

そんな私だって、仕事ではコンピュータを使っています。役所なんかに仕事上の手続きを聞いたりすると、ホームページから必要書類をダウンロードして下さい、なんて言われることもあるので、使わざるを得ないというのが本音ですけど。だけどあのテレビ画面とか、ピッとかブーンとかいう電子音を仕事以外に見たくないです。聞きたくないです。あれは神経に障ります。なんて言ってる私は、もう遅れているわけですね。

とにかく、あんふぁんてもホームページとかアドレスを持つようになりました。ホームページを作ると聞いた時、私はもう、あんふぁんてはそのままネット上に放たれて、勝手に増殖し、情報が行き交い変化し、思いもよらないような人間関係が生まれるのかと、漠然とイメージしました。しかたない、時代の波だからと、ちょっと諦めの気持ちもありました。私はインターネットのことがよくわかっていなかったし、いまだによく知っているとは言えません。

とりあえず私たちの世代のあんふぁんては、そこで区切りがついたと思いました。ところが会報はさらにゆっくりペースで発行され、送られ続けました。結局あんふぁんてはインターネットに飛び込んでいけなかったのですね。だから増殖しなかったし、高年齢化とともに会員数が減るのはしかたないです。

でも若い親たちは、それなりにインターネットなりメールなりを利用して、情報交換、友達づくりをしているのでしょう。けれど、今のところは親達も子ども達も、全然幸せじゃないようです。親や子ども達に関する、とんでもなく恐ろしいニュースがあまりにも多すぎますから。

どんなに社会がデジタル化しても、生物としての人間が急速に変わるとは思えません。人には、特に子どもには自然が、つまり土や草、木なんかがどうしても必要だと思います。親の愛情はもちろん、友達も必要です。なまの人間の友達が。

こんな時代に密室育児から脱出するにはどうすればいいのでしょうか。（密室育児から起こる子殺しは減っていないと思います。）ＩＴとかテレビ番組に囲まれたＳＦの世界で、ロボットでないナマの子どもを育てることは、相当しんどいことじゃないでしょうか。ついこの間まで、紙オムツはいいの？とか、テレビを子どもに見せる？見せない？とか、悠長なことを論争していました。それが今では、ゲームやチャットを中断させて子どもを、いえ大人も、外へ、自然の中へ引きずりだすのはとても大変なことになってしまいました。クローンでもなければ、ＤＮＡ操作もしていない自然な子どもを産み、育てることは、すごくリスキーなワクワクする趣味になってしまうのかも知れません。

私たちは私たちなりのあんふぁんてをやってきました。これからのあなたたちは、あなたたちなりのあんふぁんてをやってください。別に名前は「あんふぁんて」じゃなくていいんです。預け合いだってしなくていいんです。使えるなら保育ロボットを参加させるのも、ありでしょう。けれど時代がアナログからデジタルへ変わっても「**女の自立、男の自立**」のバトンだけは、これからの世代に渡したい。自立してない人間が、ロボットに支配されちゃう近未来は見たくないですから。それと、とにかく一人で子育てしない方がいいと思います。これ、とりあえずグチじゃなくて伝言です。

仲間は財産

多摩市

今をさる30年前（言い方が古いですね）、うちの子は「小」の、その下でした。体格の良い赤ちゃんが「りっぱな子」にみえて仕方がありませんでした。子どもが1歳ぐらいの時だったでしょうか、友人の紹介で、あんふぁんてに入り、共同保育を始めることができました。そのなかで、なんと、うちの子より小さくて、食の細い子がいるではありませんか。でも、その子はぴょんぴょん跳ねて、元気のいいこと！なあんだ、ちっちゃくても、いっぱい食べなくてもいいんだ!!わたしの心が、どれだけ解放されたことか。これが、わたしの子育ての原点になった出来事でした。おおきくなるまでによその子とあまり比較しないで育てられたのは、こんな体験のせいかもしれません。ちなみに子どもは、ふたりとも独身で、ひとりは自活して、もうひとりは家から職場に通っていますが、30歳までには、独立してもらいましょう。

ところで、共同保育以来のおつきあいとなると、25～30年ということになります。ごく近所ではなかったのも、つかず離れずでよかったのか、ほんとうに永く続いているものだと、われながら感心します。いっしょに子育てした仲間というものは、信頼感があるんでしょう、安心して接することができる。もう、子育てのことよりは、自分のこと、親のこと、目前に迫った夫の退職後の暮らしのこととなど、話したからといって、すぐ解決できるような問題ではないことばかり。でも会うだけで、ほっとするのはわたしだけでもなさそうです。話せなくとも、会うことで救われた気持になったこともしばしばでした。これからもそうなんだろうな、と思います。結論が出てしまったようだけど、それにしても、友人ってすごい財産だと思います。お金はたくさんなくたって、仲間がいれば大丈夫！お金じゃ買えない、歳月と誠意をかけた大事なもの！

もうひとつ、仲間から学んだことがありました。それは、「物事を長く重く考えないこと」。東北育ちもあってか、気軽に話すということができなかったわたしは、東京の人たちの決断の早さにびっくり。物事はだらだらと引き延ばさない、重くいつまでも考えればいいというものじゃないんですね。話すことで問題の糸口が見えてきたり、同じ考え同じ経験の人がいることがわかったりする。もちろん、別の意見に驚いたり、なるほどと思ったり。話してみるということが、いかに大切かもわかりました。

そうすると、自分の気持をどれだけ素直に表現できるかということも、大事になってくる。今思えば、子どもを産んで育ててはいても、ちっともおとなじゃなかった。人と接することで、少しずつ成長できたんですね。もちろん、今もわたしは発展途上のひとです。

最近は、まわりから、とてもはっきりしている人といわれるようになってしまいました。そんなにはっきりしている人間とは思っていないんですけれど、これからでもどんな人になっていくのか、自分でも楽しみ。こんなことを言うということは、だんだん自分にこだわらなくなってきたのかもしれません。あまり自分にこだわると、真実がみえなくなってしまうような気がしています。事実を受け入れたうえで、真実のわかるひとになりたい。なんだか、いいことばっかり書いたみたいですが、何人もの仲間と関わってはきたけれど、現在もおつきあいしているのは、数人です。当たり前ですが、通じるひと同士が残ったということなんでしょう。だから、今の仲間に感謝！

「もうひとつ」の…教育ママ

中野区

「あんふぁんて」と聞くと、腹ボテの身体で事務所を訪ねたことを思い出す。創刊準備号に、母であっても、妻であっても、「自分」を持っていたい、みたいな呼びかけ文を読んだとき「あ、これだ」と思ったのがきっかけだった。パートナーと暮らすと、妻にされ、子が生まれると母にされる。周囲の女たちはごく自然に、それをやってのけているようにみえて不思議でならなかった。パートナーと同居しようと、子を生もうと、「妻でも母でもないゾ」とつっぱっていた私は、タイムリーなお誘いに飛びついた。

さっそく、あんふぁんての集まりに出かけると、妻でも母でもない、私は私よと、体中からムンムン発散させている女性たちに大勢会うことができた。彼女たちとコンサートを開いたり、泊まり会やら飲み会に参加して楽しんだ。それもつかの間、住み慣れた東京を離れて長野の山奥に移住したため、子どもたちとの預け合いにはほとんど加われなかったが、当時出会った女性たちと、いまも交流が続いている。

◇◆◇◆◆

私の、「母ではない」というつっぱりは、母や妻役割りを求めてくる社会に対してであり、子への責任を放棄することでは決してない。Kはとっても可愛かった。

しかし、パートナーとは4年足らずで離婚したため、働きながらの子育ては奮闘に次ぐ奮闘だった。子育てを楽しむというところまで行かなかったのが残念だ。休みの日にKと一緒に遊んでいても、私の頭の中はこれからこなすべき仕事や家事のことが頭にちらつき、「はやく、はやく」とせっついてばかり。そのころは仕事が変わったばかりで、前ばかりみて突っ走る生活を送っていた。必死になっている私の背中を見て子どもは学んでくれるだろうなどと、身勝手にも考えていた。

「男の子らしく」ない子ども、家庭責任の持てる子どもに、というのが私の意思だったので、小学生のKにテレビは1日30分、市販のお菓子はだめ。赤やピンクの服を着せ、台所仕事を強いた。見事にもうひとつの「教育ママ」をやっていた。受験校に進学させ、大企業に就職させるために勉強を強要するのと、どこが違うの？といまでは余裕で思えるが、当時はそんなこと考えもしなかった。

◇◆◇◇◆

小学校の卒業式に、クラスの男子はみな中学の制服を着て臨むという。「そんなバカな」と思ったので、「セーターとズボンをはいて行けばいいよ」と言うと、Kは「それなら出ない」と言い始めた。押し問答の末に泣き出したKを見て、しぶしぶ制服を買いに走ったこともあった。

中学1年に進級してからいくらも経ずに、Kは登校拒否になった。これまで6年間、子どもが学校に行くことが当たり前だった生活が激変してしまった。

Kは家に引きこもり精神的に不安定になった。一方的な価値観の押し付けが原因で登校拒否になったのかどうかは分からない。しかし私の場合は、Kの気持ちをもっと知ろうとすることに目を向けていなかったのは確かだ。

子どもと向き合うことは辛抱がいったし、苦しいことでもある。「正しい」と信じてやってきた子育てに大きなバッテンが付き、虚しさにも襲われていた。何が間違っていたのか、「正しい」なんて正義感振り回したからか、といくら考えても答えは見つからない。息子が何を望んでいるのか、どうしたいのか、そのつど聞いてきたのにとグチっぽく友人に言ったら、私のやっていたことは「聞くのではなくて詰問だよ」と言われてしまった。子どものことを相談したカウンセラーからは、「あなたが変わることです」と言われて、「なぜ私が？」と思う。

◇◆◆◇◆

長い長い紆余曲折を重ね、気がついたら、そのままのKを受け入れている私がいた。肩の力が抜けて、とてもラクになったのを、昨日のことのように思い出す。Kも同じようなことを言っていた。そして、バーゲンセールのように使ってきた「ありのままを受け入れる」ことが、私にはどんなに難しいことだったか。

あんふぁんてとほぼ同年齢を生きてきたKは、いまは同居している人という感じだ。子どもとの関係は、時とともに変わっていくことを実感している。

人との出会い、そして私とは…

横浜市

２００４年は忙しい年だった。6月再婚、8月初孫の誕生そして転職。とりわけ孫の誕生は「世代交代」を感じさせる瞬間だった。

「あんふぁんて」を初めて知ったのは今から28年前、私が26歳、第一子が2歳の時だった。朝日新聞に掲載された記事を片手に、しばらくぶりに都心に出かけたその日のことは今でもよく憶えている。千葉から2時間近くかかってようやく辿り着いた会場は、同じような小さな子ども連れでいっぱいだった。何もかもが初めての経験であり、何が始まるのか不安が先立っていた。反面、何か不思議な新鮮な感覚に包まれていた。

その日分かったこと。「子どもがいても女性は行動できる。」すごいじゃない！！帰りの電車では意気揚々と「さあ何をしよう。」と眼の前は輝いていた。それからまもなく世田谷区内の社宅に引っ越すことになり、あんふぁんての会員との交流が始まることになるのである。

第二子が誕生し、梅が丘の羽根木公園を拠点とした「野外保育」、あんふぁんての会報紙への投稿と今までの生活にはない時間と人との出会いが数多くあった。その「野外保育」を、今年30歳と26歳になった子ども達は覚えていない。そんなものなのかと少しがっかりするが。ただ当時知り合った○○さんちの○○ちゃんというように、私の口から出る友人の名前や遊びに行ったその家の雰囲気を断片的にではあるが憶えているようだ。

4年間の世田谷にいた時期が、「あんふぁんて」での活動の全てである。僅かそれだけの経験が自分にどれほど影響を与えたかは、当時の私は知る由もなかった。

30歳で不動産業界に就職、38歳で離婚、45歳で飲食店を開店、7年後の52歳で倒産。そして今年54歳で再び不動産業界に復帰。なんともせわしない人生だ。しかし、今は楽しいですよ。その時々で苦しんできたものの、精一杯やってきたという充実感はある。（人に迷惑をかけた分、胸を張って言っちゃだめかな？）

自分の考えで決断し、行動し責任を取る。これは個々の誰からというより、私は「あんふぁんて」に教えてもらったと思っている。はっきりと言うことができる。わたしの性格は「あんふぁんて」によって明るく行動的にと変化した。当時事務局で出会った人々は私にとってまさしく「カルチャーショック」。こんな考え方あるんだの連続だった。それは自分自身を見つめ直すチャンスだった。おりしも高校・大学時代、学生運動真っ只中の時に完璧な日和見であった私にとって、「子連れ学生運動」の様な感触であった。渋谷での反戦デモはその最たるものだ。

一方、どこかで自分が無理をしているのも否定できなかった。それが「あんふぁんて」から離れる要因ともなった。当時私はともかく仕事がしたかった。経済的に自立したかった。収入ゼロ＝自分の存在価値がない、と思い込んでいた。家事の労働価値、子どもにとっての母親の存在価値、その考え方によって私は抑え込まれなかった。よくいえばエネルギーに満ち溢れていた。子どもとの密着（閉塞）した時間が逆に原動力を創りあげていった。「自分の人生は自分で造る。」私はその思いにつきすすんでいた。しかし現実は失敗（客観的には）の連続だった。自分の性格と能力への判断に、冷静さと厳しさが欠けていたと、今は思える。

子どもをぬきにしては語れない「あんふぁんて」との出会い、そして自分の生き方。しかしその子ども達もすでに自分の道を歩み始めている。今の私のテーマは、「自分」という生まれながらにしてそなわった性格、後天的環境要因に影響され培った性格、そして限界のある能力をいかに受容し、自己を認めて生きていくか。仕事をする、料理をする、運動をする、趣味を楽しむ、今の自分の日常性の中で、自身が魅力を感じる生き方を全うする為には、そうした精神面（性）の重要性をさけては通れない。私の原点になった「あんふぁんて」に、あらためて感謝をしたい。なぜなら、私の精神面を創りあげた貴重な「時そして場」であったから。

生き延びた私

調布市

私は今、調布市で1人で鍼灸院をやっている。鍼灸師という職業、しかも1人でやるというのがものすごく私に向いていたらしく、あっという間に12年もたってしまった。離婚して1人で育ててきた3人の子どもたちもみんな成人し、今年は初孫も誕生した。私にも戦友になれそうな男ができた。

32歳のときに、鍼灸こそが私の職業だと思った。まるで天の啓示のようだった。友人たちには「えっ、今度は鍼なの？」とあきれられたけど、私の中には強い確信があった。ボランティア活動は、女の善意と熱意を男に利用されるというパターンが多い。わが子の病気や運動の関係で素晴らしい医師たちに出会って、職業を通して社会に奉仕したいとずっと模索していた私にとって、それは小躍りするほどのうれしさだった。

でもその当時は、うつのど真ん中だった。怪我をして家にこもっていた間に、それまで蓋をしていた人生の暗闇を一気に覗き込む羽目になったのだ。だが、隠されていた本当の自分が動き出したからこそ、天職にも目覚めることができたとも言える。うつの奥底には回復への処方箋もあるはずだ。

19歳で妊娠し、大学をやめて結婚した私。子どもを育てるに当たっての私の唯一最大の目標は、「自殺をしない子どもにする」だった。今から思えば異常なことだ。この世と繋がる最大の絆は子ども時代の楽しい思い出だと思った。あんふぁんてを知って、共同保育で仲間を作った。私は生涯の友人を得た。子どもたちは楽しい子ども時代の思い出を作り、仲間同士の遊びを通して対人関係を学んだ。

あんふぁんてと出会った頃の私は、人からは全然そう見えなかったらしいけど、無意識の中には自殺すれすれの危うさがあった。対人恐怖症がひどくて、縫いぐるみと近所の子どもしか話し相手がいなかった。様々な人と出会うようになり、好奇心の赴くままいろいろな活動をやったことは、新たな人生の第一歩だったけれど、自己嫌悪や罪悪感、生きる力のか細さはそのままだった。

鍼学校に入学してすぐに離婚した。鍼灸の世界は、私のしてきたあらゆる回り道が一筋の道になる、まさにこれこそ私の来るべき場所だった。だが、天職を得たことと、結婚生活の不幸は別の問題だったことにはっきりと気がついてしまったのだ。何とかバランスを保っていた精神の均衡は一気に崩れ、地面がなくなって空中に放り出されるような極度の不安感に襲われた。「自殺」という言葉が頭に浮かび、このままでは死んでしまうと思った。

結婚生活のあまりの息苦しさにずっと自由を求めてきた私だけれど、手にしたのは表面的な自由でしかなかった。孤独とセットの自由で、心はボロボロだった。私を理解することのできない愛の冷めた夫と共にいることは、不可能だった。離婚して、生き延びられることを知った。パンドラの箱の中には希望がある。

私がうつの間、子ども達は相当つらい思いをしていた。知ってはいたけれど、自分が生き延びるのに精一杯で手助けはできなかった。きっと自力で立ち直ってくれると信じていた。落ちこぼれになったり不良になったりといろいろとあったけれど、彼らは強く優しい。ありのままの自分で愛されて当たり前と自信たっぷりだ。

結局、病気の根っこは、親の望む理想の娘像と、本当の私自身がかけ離れていたことだと思う。「愛」というものが、自分のエゴと分かちがたく絡まりあったまま他人に向けられたとき、人は愛しているはずの相手にひどい仕打ちをしてしまう。抑圧された無意識によって、自分が不幸になることを選ばされたりする。すでに私の世界から消え去った何人かの男や女たちを、選んだのは私だった。

やっと私も、幸福を目指す選択ができるようになった。うつだった間、必死で友人を作り家事をし子育てをし、勉強し仕事をし続けたことが、今の私の身についているのはラッキーだ。現実を生きる確固たる支えになってくれている。

本当の心の回復には何年もかかったけど、生き延びてみるものだとつくづく思う。ありのままの自分を愛し、自分の選択を愛し、共にいる人々を愛することのできる今の私。心の底から喜んだり悲しんだりできる私がいる。あの時死んでたら、苦しい記憶しかないままで、その辺をうろうろ彷徨っていただろうな。

あんふぁんてが仕事のきっかけ

品川区

〈あんふぁんてとの出逢い〉

近所に住む友人から誘われて、現在28才になる長女が1才の時のことでした。出産のために退職していた私にとって「子どもを預け合い、自分の時間を作る」という考えや活動内容には目からウロコ状態で、すぐに入会。届くニュースが新しい社会とのつながりに思え、毎月ワクワク読んだことを思い出します。

数年前に退会しておりましたのに、300号特別号とのご連絡をいただき、もう少し深い関わりをしていたかったと思います。

第1号は私の結婚した時だったようですね。昨春、夫の60才祝いも兼ね、子ども達の企画と出費とで京都・奈良へ久しぶりのファミリー旅行。30年間も一緒に暮らせたことが不思議な程。あんふぁんてと出逢っていたおかげです。

〈入会して〉

入会時の自己紹介で「布地からの手作り品の製作をしている」ことを書いたことから、『ガレージバザール』のようなイベントに事務局からお誘いがありました。新米会員でしたが、思い切って参加。作品の販売をしました。思い起こせば、この第一歩が現在の仕事につながっていたことを、改めて実感すると共に、「あんふぁんて」に感謝です。

入会後、友人はすぐに2人目の赤ちゃんを私に預け、お姉ちゃんだけ連れてアートフラワー教室に通いました。とても良い交流をしていたのですが、数年後、引っ越してしまいました。

〈登校拒否の体験が本に〉

2人目が生まれ忙しくなりましたが、育児をしながら、子ども服やインテリア小物の製作を続け、デパートでの販売も出来るようになっていきました。

残った布を利用して、地域の子どもたちへ手作り指導を続けている生活の中で、小学校3年生になった長男の様子がどうも登校拒否のようだと気が付きました。

その頃はまだ経験者も少なく、担任もはじめてだと言うし、他の相談機関もわからず困りました。知人の紹介で、東大の精神科医がボランティアで開いていた「登校拒否児の親の会」に出席。そこには、子どもたちも参加し、自由に話し合える会でした。親の気持ち、子ども自身からの体験話し、夫婦のこと、学校のこと、先生の対応など、たんさんの情報を得ることが出来ました。私の子どもはすぐに学校へ復帰したのですが、社会人になっても悩む親子はたくさんいました。

その体験をあんふぁんてニュースに投稿しました。この文章に目を止めてくださった出版社“企画室”より、「十五人の親たちの子育て奮戦記」が1年後、本になりました。

中学3年生になった長男が、高校へは行かないと言ったのですが、公立高校から四年制の大学も無事に卒業し、社会人となって2年目。大阪から戻らず、奈良県で元気に暮らしているようです。

〈品川区女性問題コースの海外派遣生に〉

1994年、仕事の他、地域と関わっていると、いろいろな親子や女性たちを知るチャンスがたくさんありました。地域社会にも疑問を感じていたことなどを作文に書いて応募。代表に選ばれた3人で、全国の研修生とヨーロッパ諸国へ勉強に。主婦の目から見た海外では新しい発見があり、世界で活躍する女性たちと肌で接することが出来ました。

更に全国から参加した女性施策の仕事をする人や、地方で活躍する県民派遣の人たちとの出逢いから10年過ぎた今でも、深い交流が続き、友情を得られ尊い経験をしました。

〈障がい者が洋服に困っている〉

海外派遣生になる1年前に、障がい者との出逢いがありました。その頃北欧から届いた「ノーマライゼーション」とは、誰もが普通に暮らすという意味だと知り、福祉が進んでいる国々のことも学び、いろいろ驚くことばかりでした。

今から10数年前のことで、『日本ではこれから高齢社会を迎える時代だ』と言われはじめた頃でした。車イスを利用している人の大変さなど何も気づかずに暮らしていた自分でしたが、試行錯誤で車イス用の洋服作りを開始。同時に姑の痴呆症との戦いも始まりました。

〈ハンディ&シニア企画を想う〉

障がい者・高齢者が、着やすくて着て楽しい洋服の制作、研究、発表。素材に使った着物や帯は大変人気があり好評です。『リメイク・リフォーム教室』では、リサイクル運動も含めて開催。ファッションショーも100回がすぎ、10年続いた老人介護も終わり、『あんふぁんて』そのものの私です。

逃げる勇気をくれた

横浜市

あんふぁんてに入会して29年、現在私は54才、息子29才、娘27才です。埼玉県蕨市と神奈川県横浜市で共同保育をしました。子ども2人は幼児の頃、大勢の子どもと外で駆け回って遊んでいたから、楽しかったと思います。

私は共同保育で楽をしたし、さまざまな人と会って物の見方が広がりました。「幼児を持つ母親でも遊んでよいのだ」という考え方が良かった。日本の女性は、何事につけ我慢を強いられる。「貴方が夫をたてなくては」「貴方が変われば夫も優しくなる」とか、夫婦関係でも我慢を強いられる。それは間違いだと、分かりました。母親が幸せでないと、子どもも幸せでない。夫の理不尽さから、逃げることにしました。あんふぁんてから、逃げる勇気をもらって、離婚をしたのです。

私は、自分が虐待されていても、ずっと気づいてなく、弟に「それは、虐待だよ」と言われてやっと気づいた。夫の機嫌が悪くて困っていると、母や友人に相談しても、「貴方が変われば」と言われてしまう。なぐられていることを、自分のプライドのゆえに言えなかったせいでもある。毎日のように、「死ね」「ばか」と冗談めかして笑いながら言われ、4人家族の生活費を、光熱費込みで月10万円しかくれない。当時の夫の月給の4分の1だった。私は家で家庭教師をしたり、「こども実験教室」という理科塾をして家計に入れた。

いちゃもんをつけて顔を平手打ちでなぐる。食事が気に入らない。飼い犬がうるさく鳴くのはおまえのせい。電話の呼び出し音がうるさいのは、おまえのせい。肩のもみかたが悪い。眠そうな顔をして夕食の給仕をした。子どもが食事中に肘をついたのは、おまえの躾が悪いから。深夜1時や2時に帰宅して、私が寝てるとなぐる。娘は夜中に父の怒鳴り声がすると、またお母さんがなぐられているのではないかと怯える。息子は「僕のせいでお母さんがなぐられる。」と言って、「この頭が悪い」と壁に頭をごんごん打ちつけたのは小学校1年の頃。セックスは私が眠りこんでいるときにしかしない。これは強姦であった。娘の体に触ったり、布団に引きずり込んだりする。

離婚することに決め、外でのフルタイムの仕事をみつけ、弁護士の先生を頼み、家庭裁判所と地方裁判所を経て、3年かかって離婚した。夫は結婚当初から、「自分は親に愛されなかったから、母代わりに愛してくれ」と言っていた。夫も、父親になぐられ、母親に小学校6年まで、一緒の布団に寝かされていた。家の外では、人当たりの良い普通の会社員。もう、暴力の連鎖は嫌ですね。息子が1年前に結婚したけど、「2人で仲の良い家庭を築く」と誓っていた。

ところで、私は再婚もした。子ども2人に恋人ができたとき、もう親の役目は終わったと思った。離婚のときも、離婚したいと思うと、子どもに言ってから弁護士の先生のところに行ったが、再婚のときも、今から結婚相談所に行ってこようと思うと、子どもに言った。気の合う人を見つけて再婚した。相手の子どもは3人で継母役は苦労した。あるとき、経験者から「躾けなくて良いんだよ。かわいがってあげるだけで良いんだよ。」と教えてもらい、そういうものかと分かった。

一緒に暮らしたのは3年間。私の職場から遠くて疲れたので、今は私は自分のマンションで自分の娘と2人で暮らしている。ローンの返済には、少し苦労してるかな。節約に励む生活。お互いの子どもが巣立っていったら、夫と2人で暮らす予定。あと5年後くらいとみている。

昔の、悲惨な生活を思い出すのは、辛い。いつもは記憶にふたをしている。もうそろそろ卒業しなくては。自分で自分をかわいがろうと思う。人生、いろいろあったが、これからもいろいろあるかな。

ルーツ

新座市

いろんなことは言い尽くした。思い出話はきりがない。あっ、そうだ！もし彼女がいなかったら、私はあんふぁんてと出会えなかったのだ。その彼女のことはいつか、書きたいと思っていた。

彼女、Y子さん（Yちゃんっていいたいけど）は大学の同級生。何故か学部が違う。そう、私は自分の属する専修クラスでは、全く浮きまくり、とうとう親友と呼べる人とはめぐりあわなかった。国文を専攻する別学部の3人と親しくなった。それというのも、私は半年くらい、何と学校の門の横にある喫茶店でバイトしていたから。授業には出ないで、コーヒー1杯でねばる学生（男）をぼんやり（しっかり）眺めるのが楽しかった。

彼女は劇団に属し、宮本研「ザ・パイロット」にも出た。宝塚に本当にいきたかったというスラリとした姿。役者として、イケてた。何故、プロにならなかったんだろう。卒論は「坂口安吾」で、優だったよといっていたっけ。女子高出身の彼女の自然体の本音の生き方は、頭デッカチで男女共学進学校出身の私にとっては「異文化」。要するに、頭と身体が一致しない不自然な自分を、いつも彼女と彼女の友人たちの前で感じていた。

時代は学生運動の季節。ご多分にもれず、野次馬プラスのセクト・シンパ。私もノン・セクトを気取り、すべての派の集会に出かけては、どこがどう違うのか、マジで悩んだこともある。寝食忘れて社会科学系の本を読んだのは…、アレはどこへいったんだろ。

コワーい活動家のお兄さんに「いよっ、遊撃隊！」とひやかされ、「ソフト・アナキストやねん、あんたは」等――そうか、チア・ガールだったかも？

で、気がつけば社会人。シコ・シコとやってるよが合言葉の'70年代。全共闘には乗りそびれのハンパな'68年卒業ボイコット組だ。

彼女とは時々会っていた。私は不本意なケッコン。お先走りのフリー・ライター稼業が彼女の仕事。ウーマン・リブの生情報やら映画の話が、「進んでいた」ように思えた彼女の日常。

私が初めての出産・育児中も、関心をもって接してくれていた。「名まえはあらたとつけたのよ。新、シンよ。革命という意味」と自分に言いきかせるように彼女にも伝えたよね。そして当時、高田馬場のマンションの一室で開いていた「みず・てっぽう」という、一時保育の場を彼女から聞いて、ワラをもつかむ思いで子どもをひっぱっていったのだ。

そこで出会ったのが古知さん。私が預けた2時間、ほとんど泣いてたらしい2才の息子。でも、私が「カメラ買ってくるね」とだましたので、納得したこともあったっけ。もうひとりの保育担当が、今は「KUPU―KUPU」オーナーのSさん。

彼女・Yちゃんとは20ン年前、またまた別の団体（有機無農薬の農場を共同運営する消費のグループ）に誘われた。子どもワイルド・キャンプや収穫祭等に、子どもを自然にふれさせたいと常磐線で出かけた。別ルートで、あんふぁんての会員もこの農場には親しい。

ところが組織の内部分裂で、彼女と絶交状態になって、今に至る。私の辞書には「思想信条で友情がこわれる」という項目がないので、このことはいまだに私にとっては未解決。風のたよりにウワサは聞いてるよ。会いたいなあ。あんふぁんてのこと知ったら、何ていうかしらーね。

「私は息子に連と名付けたの。連帯の連よ、もちろん」とうたうようにつぶやいた彼女の声は、今も耳にのこる。

連くんは元気ですか？新は、今もあきらめずに音楽を続けてます。7年前の最初のCDのタイトル曲「ひまわり」は、私のお気に入りです。

『ひまわり』

最近なんだか笑い方も下手くそになってゆく
無邪気に笑えてた幼き僕が僕じゃないようだ
他人のことを信じる事も思いやる事も
忘れかけているのに
人を愛することなんて無理だろう
Ah、どうすりゃいいんだ
自分ばかり大事にしてる僕は
傷つくことばかり恐れて先に進めそうにない
もっと笑えるはずなのに
あのひまわりのように
真っ直ぐ真っ直ぐ伸びて
天真爛漫に咲き誇りたい

口先ばっかで
うまく世の中渡ってたはずだけど
気がついたら恋人も友達も誰もいなかった

気がついたら恋人も友達も誰もいなかった
Ah、偽り続けて僕は
何を勝ち取ろうとしてたんだろうか
ありのままの僕でいる事　忘れかけていた
飾ってばかりで
あのひまわりのように
強く強く強く伸びて
天真爛漫に咲き誇りたい

生きていることが美しさだって教えてくれた
あの夏のひまわりのように生きなくちゃ
いつの日か夢とか愛とか努力とかを
避けて通ってきた
昔と比べて汚れてしまったのか
現実は現実でしかなく変わりやしないと
割り切ってきた
それが普通なんだって　そう結局
僕は小さい頃描いた立派な大人って奴には
ほど遠い存在になってた
君はどうですか？
あのひまわりのように
強く強く強く伸びて
天真爛漫に咲き誇りたい

1970年代の会員から

松戸市

なんですって！あんふぁんて30周年。生後8ヵ月で共同保育に参加した私の第一子も29才。さもあらん。そして、とりあえずの深呼吸で、その次の息つぎはどうしようか・・・とは、あんふぁんてより原稿募集のFAXを受け取った時。

私は友人と写真とビデオのコラボレーション実験中、タイトルは

「愛に終わりがくるから　Endless Love
旅に終わりがくるから　Endless Holiday
だからといって
地球に終わりがくるからと
Endless Universe　とは言わせない…。」

あんふぁんて参加当初から、キルケゴールの―揺りかごを動かすもの世界を動かす―の言葉が私の子育てを支え、えいえいと雑用の続く育児に太い綱の様な意味と気迫をもたらしていた。あんふぁんて―出産する、創造するというフランス語もいたく気に入って、まさに子どもの力を借りて自分の生を表現してきた。

さまざまな時間に子どもの息づかいと私の呼吸はからまり生活をして来たが、独立しつつある彼らへはごめんねとありがとう、である。月並みだけどね。

子どもを育てることは、平和な世界を創り出していくことと無関係ではない。あんふぁんて、いいの？休眠とかいって！核家族の密室育児から共同保育をお母さん達で始め、専従の若い女性を雇い、シャドーワーク、アンペイドワークを考え、学校問題、就学時検診、空気汚染、土壌汚染、安全な食べ物、水、せっけん、安全な教育（これはたった今出た言葉）、憲法9条、教育基本法、心のノート、まだまだなんとかしなくっちゃが山積みだよ。そろそろ自分の人生を楽しみたいも解るけど（↑これ自分に言っている）、生涯前衛でいたいよ。（↑これ私の美意識）

かけがえのない仲間

大田区

「30周年」という言葉にふらっとする。そうかぁ30周年かぁ。わたしにとってのあんふぁんてってなんだろう。子どもを産んだことであんふぁんてに出会い、大げさに言えば自分も新しく産まれたような感じかな。

手元にある『密室育児からの脱出』を開くと、自主保育に預け合い、共同保育、婦人会館に国立婦人教育会館、子持ち女集まれ！新幹線にベビーコーナーを、いつでもどこでも保育を、私も映画に行きたいよ等、今思い出しても必死で楽しく、みんな若かったなぁ。

あの頃の仲間とは今でもお互いに気心が知れた仲間だ。みんなもともとエネルギーがある個性的でステキな人たち。テレビでは婚外子差別判決勝訴であの人が写っている。ワールドピースナウでの集会ではあの人にあった。皆いろんな所で元気に活躍している。それはあの頃あんふぁんてで経験した、ちょっとした疑問や自信とどこかで繋がっているからだと思っている。

私にとってのあんふぁんてとは、子どものことも含めていつまでも付き合える、掛け替えのない仲間だと書くのはきれいすぎるか。

人生の出発点

川崎市

「あんふぁんて」創刊号を読んだ時から、30年の時がたちました。1歳だった娘は5歳の子を持つ母となり、私が入会したときの年齢を越えました。当時は50歳代の自分など全く想像できず、この幼子との閉塞状況が延々と続くような気がして絶望的な気持ちだったと思います。過ぎてしまえば、皆懐かしい思い出ばかりです。娘と孫をみると、自分の時代の価値観とは隔世の感があり、時代背景とともに意識もかなり変化するのだなという事を実感しています。

人に優しく、自分らしく、自然に、自信をもって、生きることを「あんふぁんて」の仲間から学びました。「あんふぁんて」は今でも自分の人生の出発点だと思っています。

『自分で何かを始める』精神で

国立市

あんふぁんてに入会した時は、2番目の子どもが1才になってすぐだったと思う。もともと私の人生設計に子どもの事は全然なかった。けれども、成りゆきで産んだ子どもへの夫の喜び&子どもの可愛さで、実家で私の母と5人で過ごす生活を続けていた。その生活はそれなりに楽だったのだけれど、近所の子どもを介した付き合いには飽き足らなかったし、周りは私の扱いに苦慮していたと思う。うんと浮いた存在だった。これは今もかな～。

そんなときVISAの会報誌だったと思うのだけど「あんふぁんて」の記事を読んだ。なにが私を魅了したのかはもう忘れたけど、これだと思って入会した。けれど入会すればすぐに近所にグループが有って面白い事が始まると思っていたのに、会員は私の町にはいなくて、近くで活動しているグループもないありさま。それでも電車に乗って何度か近場の集まりを重ねた。私が入会したので、集まってくれる優しさを持った人達だったけれど、それ以上何かが始まる訳ではなかった。

もともと興味の有る事には突き進む事が好きな性格だから、「事務局に行ってみるか、手も足りないみたいだし」ののりで、西永福町だったかの大山宅に行ったのは、入会してどのくらい経っていたのか、それともすぐか…もう24年も前の事だから忘れた。そこで川崎さんをはじめ、面白い面々と出会えたのだ。忘れもしないけど（あっちはわすれている）大山さんに「何かをしてもらえるなんて思っちゃダメ。自分からしなきゃ」と言われて、病気になってやりたいことから逃げるように結婚して主婦になる前は、その路線で生きて来てたのを思い出した。その言葉がきっかけとなって、いままで自分で何かを仕掛けて生きて来たのかも。大山さんに感謝だね！

それからは私があんふぁんての事務局をやったり、優生保護法で厚生省に行ったり一時期のあんふぁんてを支えた？かも。短かったけれども。

その後、自分のお金を生み出すために子どもを保育園に預けて働きだして、あんふぁんてからとうざかってしまった。でも、あの日出会った因縁で川崎さんが、あんふぁんてに会員でない私をつなぎ止めていてくれる。こうして最後の会報に文を載せてくれるのも、あんふぁんての『自分で何かを始める』の精神でウロウロしている私を認めてくれたからかしら。あんふぁんてが終っても、私の「あんふぁんて」的なものは、終らない。

ネイティブで行こう！

江戸川区

一粒一粒の種が目覚め、一匹一匹の動物が産声をあげる。この神秘な力のおかげで、我らもまた生きているのだと、かつてスー族の首長シッティング・ブルは語ったのだった。だからこそ、我らの隣人や動物たちが、我らと同じ権利を持って、この大地に住むことを敬わなければならないと。私は初めてのお産を通じて、おそらくそのような意識の開かれていく経験をしていたのだと思う。

「あんふぁんて」に集まってくる人達は、きっとどこかで、同じような思いを抱いていたのではないだろうか？あれから四半世紀が過ぎ、決して世の中が良くなったとは言えない現状がある。それでも希望があるとしたら、それは女性が子供を産むということではないだろうか。一部の資本家だけが快適に暮らせるような、そんな競争社会はもういらない。文明の病はもう、手遅れかも知れないが、次の世代への道標なら残せるはず。私の中の「あんふぁんて」は、形を変えても存続しているのだと思う。

多くを創り出したあんふぁんて

新宿区

「あんふぁんて」に入会したのは、1975年。それから30年たっているが、わたしが直接関わったのは初期の頃です。わたしの中では、今でも「あんふぁんてしている」というのが自然なほど、長いつきあいを重ねる友人や、しばらく会っていないのにずっと一緒にいると感じる人たちとの出会いの場です。

＜1975　自分探し＞

友人がつくった詩を思いだす。「闇のなかで、闇を見ていた。闇に慣れてくると、となりが見えてきた。となりには、無数のわたしがそこにいた。子どものころの翼をもぎとられてしまった女たちよ。」

母親ってなんだ？女ってなんだ？妻ってなんだ？自分ってなんだ？どうして、らしくって言われるんだ？なんで、女だっていうだけで、こんな扱いをうけなければいけないんだ？18歳で結婚して、7年目ぐらいだった。3人の子どもを育てており、東京郊外に住む核家族で、会社を「育児休暇中」だった。

わたしは、結婚や中絶や出産という人生のイベントのなかで、喜びと悲しみ、興奮と恐れ、不安と焦燥のジェットコースターに乗っているようなものだった。わたしは、歓声をあげてこのイベントを楽しめなかった。息苦しさのなかで、もがいていた。どうしようもない混乱と、暗闇を感じていた。自分探しは「専業主婦からの脱出」と「子どもからの自立」などがテーマになっていった。

「あんふぁんて」を知ったのは、朝日新聞であったかと思う。記憶が定かでない。覚えているのは、「あんふぁんて」に行ってみようという気が湧いてきたのがごく自然だったことと、わくわくした気分だ。出産と出生という作業のなかに、「子育て中の人がいるグループがある、ともかく行ってみよう」という思いが生まれた。この思いは押しとどめるものがなく湧き出してきて、からだの外へと拡がりでて、わたしを取り囲み渦巻き、わくわくさせた。3人の子どもを連れて、おむつと4人分のお弁当を持って、誰も知り合いのいないところに出かけていったのだ。

わたしは、「「あんふぁんて」と出会い共同保育を始めた。小田急線・南武線・田園都市線のグループや個人と行き交うようになり、「あんふぁんて」の人の繋がりが膨らみ、「あんふぁんて」にとどまらない人のつながりができていった。このわくわくした気分は自分が生まれ出てきたときに持っていた力を取り戻してくれた。　行き詰まったときには「自分のなかの暗闇」と「わくわく」を探せというのが、それからのわたしのやり方になった。

今、共同保育でいっしょに遊んだ子どもたちと会うとき、あんふぁんて仲間だと強く思う。反対に、知り合ったのはあんふぁんてだったっけ？と思うほど、長いつきあいになってしまった「大人」のつきあいもある。

＜内にある気づきのフリースペース＞

「あんふぁんて」で得たものは他にもたくさんある。情報誌の編集への参加をしていた時代がある。そのなかで、自分を知る『気づき』というものが大事だということを知った。読書が好きで活字人間だったわたしは、情報誌への掲載原稿は漢字を使うことが多かった。『漢字ばっかりではわからない。もっと、いつも使っている言葉で書いたらわかりやすくなると思うよ』と、率直に話しかけてくれる場であり、問題提起を深く受け止められる場だった。今でも『漢字をひらがなにすりゃいいってもんじゃないよ』という声が聞こえてくる。

この指摘は、自分の日常をありのままに表現できないこと、自分で自分の言葉を持っていないことに気づくきっかけになった。わたしにとって、「あんふぁんて」の月例の編集作業は、心の内側に「気づきのフリースペース」を創り上げ、拡げていく原動力となっていた。

＜何もないところから創り出していく＞

わたしたちが「あんふぁんて」であったから出会えたと思うことを、もうひとつ加えておきたい。

彼女が「あんふぁんて」の友人に伴われてわたしに初めて会いにきた日、性暴力から逃れて泊り込んだ初めての人となった。「今夜家に帰れない。」と彼女が言ったとき、私の自宅を緊急時の宿泊として使ってもらうことにした。それは、夫から精神的経済的虐待を受けていたわたしにとって、同じ痛みを共有する仲間としての援護だった。わたしにとっては、それからの10年、1985年まで、何組かの緊急時の「駆け込み」に自宅を開放するきっかけとなった。

わたしの場合、何もないところから、今、必要なものを産み出して創り上げている「あんふぁんて」だ。

漂流する私

新宿区

“子持ち女集まれ”　小さな朝日新聞の記事からあんふぁんては誕生した。産みの親は7人。現在、会員として残っているのは古知さんと私。7人のうち私を除く人たちは、レディース・ボイス社という女性だけでユニークな活動を続ける会社のスタッフだった。あんふぁんても当初の構想では、その会社の外郭団体という位置付けだったので、会費は無料、会報も立派な本印刷で写真も掲載することができた。

スタートして1年足らず、母体の会社が解散することになった。初めての“どうする、あんふぁんて”。社会的に名乗り出た責任上、また関わり上、その必要性がしだいに明確になりつつあった私は、継続の決意を固めていた。でも1人では…。古知とペコ（野口）が一緒にやると言った。3人だ！しかも三人三様、持ち味が全く違うのがミソ。やっていけるかもしれないと思ったが、活動費はゼロ。会費制には一抹の不安があった。では、どこかのヒモ付きになるの？　趣旨を曲げてまでお金をだしてもらってよいのだろうか。

それまで7人で仕切ってきたが、その少し前には初めて会員に呼びかけ、有志による会議を開いていた。遠く九州から駆けつけてくれた会員もいた。実状を話すと、誰かが会費で運営するのが当然ではと提案。全員一致で会費制になり、基本構想はより運動的になった。あんふぁんての必要性への熱い思いをお互いに確認し合える、私にとっては感動的な会議だった。その後、会報はタイプ印刷に変わったが、マスコミにとりあげられる機会も多く、会員は増加、グループもたくさんできた。だが、一難去ってまた一難。相互託児に付けた保険金が払えない。皆でアンケートの仕事をして稼ぎ出した。その間にもイベントの開催や関連のお役所や企業への提案など、スタッフ中心に、グループ中心に、多彩で活気に溢れていた。

それまでの私は、昼はコマーシャルの尖兵、夜は種々の遊び仲間と盛り場荒らし。神楽坂の家は自宅兼オフィスだが、しばしば70年代各ジャンルの旗手たちが出入りするたまり場になったり、パーティー会場だったり、ちょっとした梁山泊風であった。いまやすっかり有名人になったアラーキーも一部屋構えていた。そこに全く異質のあんふぁんて事務局が加わった。余談だが、保険料稼ぎで悪戦苦闘をしているときに、ソロバンパチパチ手伝ってくれたのは、その写真家・荒木さん。彼はなんとソロバン一級の持ち主だったのだ。

その数年、どうやって糊口をしのいでいたのか、明けても暮れても“あんふぁんて”。会う人構わず宣伝した。子どももいないのにとか（緑のおばさん）してとか言われたが、おおむね女性たちは好意的で協力を惜しまなかった。男友達は一定の理解を示しつつも、一様にほどほどに深入りしないでと。つまりピンクヘルメットになられては困るってことらしい。ご忠告までもなく、なれない現実があった。

名前が知られるようになって他の女性グループから共闘・共催の誘いが多くなった。だがこちらは子連れ。テンポは遅いし、不測の事態も多い。歩調を合わせるのはとても無理。では保育だけでも。私たち保育の専門家じゃないよ。子育ては誰にでもできるはず、母親だけに押し付けないでって悲鳴をあげているんだよ。そんなあんふぁんては、誰いうとなくアンノン・リブと呼ばれた。

30周年。私はいま66歳。ほぼ半分をあんふぁんてと共に生きた。仲間の皆の熱い念いが私を動かしていた。そして理解あるマスコミ関係者、エールを送ってくれた著名な人々、否応なく巻き込んでしまった友人たちの力添えも、もうひとつの大きな原動力だった。あらためて（というより初めて）、ご協力、応援ありがとう!!

仕事の場は力の論理で動く。そこでお金と引き換えに失う多くを補充してくれていたのがあんふぁんて、精神的なバランスをとり戻させてくれるのがスキーだった。3年前に大腿部骨折。あの白い世界と未来を予感させるシュプールを失った。そして、あんふぁんても…。

あんふぁんての歴史（Ⅱ）　—主なことがら、集まり・イベント、会報—

１９７９年９月～１９８９年１２月（いわば「あんふぁんて」中期）

1979年 9月　・西永福事務局に時間託児所『保育室グリーン』開設。
10月　・子どもの年令別の集まりスタート。
11月　・無農薬みかん狩りツアー。
12月　・子どもだけのクリスマスパーティー、お泊まり会。
12月号・〈就学時健診について〉の記事。
1980年 3月号・〈『家庭の日』に関して〉の特集。
4月　・新宿の『ホーキ星』が閉店し、アートスペース『アウラ』がオープン。
4月号・連載コラム「グループづくりあれこれ」。
7月　・あんふぁんてTシャツ第2弾、やっと完成も不良品で返品することに。
7月号・〈『母源病』という本の読み方〉の記事。
10月　・参加費月額400円に値上げ。
11月　・『たとえば障害児教育』上映会（豊島5丁目団地集会室にて）。
11月号・グループ「反戦あんふぁんて」への呼びかけ。
12月　・コンサート企画チーム「ぽちぽち企画」主催のクリスマスパーティー（早稲田の『ジョラ』にて）。
1981年 2月　・あんふぁんて手づくり展（新宿『スペースアウラ』にて）。
3月号・グループ「よりよいお産を考える会」を発足させ、詳細な〈出産アンケート〉を同封。
3月　・あんふぁんてトレーナー＆Tシャツ第3弾を制作。
6月　・ぽちぽち企画主催のミニコンサート「私の大好きなこのからだ…そしてすべての愛しいものたちへ」（豊島区民センター音楽室にて）。　6月号・グループ「小学校の会」への呼びかけ。
8月　・あんふぁんてキャンプ（秩父にて）。
9月　・ビデオ『ぼくのからだ、わたしのからだ』上映会。
11月　・ぽちぽち企画主催ワークショップ。
1982年 5月　・連載コラム「働くことを考えるシリーズ」。
8月　・事務局が大山宅の引越しと共に大宮八幡へ移動。
10月　・グループ「産む・産まないを考える会」を発足させ、優勢保護法改正反対の署名集め開始、厚生省・議員へ要望書提出、各政党へ公開質問状提出。

1983年 1月　・連載コラム「新会員訪問シリーズ」。
6月号・連載コラム「なぜ、いま山村留学か」。
7月号・〈母乳をめぐって〉の投稿活発。
1984年 3月，5月，7月，10月，'85年3月・若い母親のための子育て講座（池袋，池袋，横浜，千葉，京都にて）。
1985年 6月号・連載コラム「共同保育から自主幼稚園づくりまで」。
8月　・『お産サイドブック—産んだ人から産む人へ—』完成。
10月　・〈平日あんふぁんて〉，〈土曜あんふぁんて〉の開始。
11月号・〈妻と夫—性・仕事—〉の特集。
1986年 8月号・連載コラム「覚えていますか？チェルノブイリの原発事故を」。
10月　・託児付映画会グループによる企画開始。
1987年 5月号・グループ「芝居をつくろう」への呼びかけ。
6月　・『女のネットワーキング』（久田恵他のグループ編集、学陽書房刊）という本の取材・掲載に関してのいきちがいがあり、抗議して増刷分からは削ってもらうことに。
6月号・グループ「子連れの参加できる政治を考える会」への呼びかけ。
8月号・〈戦争と平和〉の特集。
9月　・「東京都芸術文化会館（池袋）に保育室を！」の署名集め開始。
10月　・署名を提出後、設計変更で保育ルームができることに。・あんふぁんてトレーナー＆Tシャツ第4弾完成。
10月号・「あんふぁんて新人、集まれ！の会」の呼びかけ。
11月号・連載コラム「フリースクール」。
12月　・あんふぁんて10周年プラス1のイベント「自分らしく・・生きようよ」（豊島区民センター音楽室にて）
1988年 4月　・デンマークの風を聞く会。
12月　・「東京ウィメンズプラザ」に保育についての請願を提出。
1989年 1月　・『お産サイドブック（改訂版）—産んだ人から産む人へ—』発行。
4月　・『密室育児からの脱出—ただいま子育てまっさいちゅうー』発行。
6月　・子育て講座「風を通そう子育てに！」
11月号・連載コラム「病めるときも健やかなときも」。

迷ったら『やってみる』

国分寺市

あんふぁんての皆さん、ご無沙汰しています。はじめまして、の人もたくさんいますよね。日本語教師をしている…です。あんふぁんてと私の関わり、そして私が今の仕事をするようになったいきさつなどを書きたいと思います。今「子育て真っ最中」という人への励ましになれば嬉しいです。

〈私のあんふぁんて活動〉

私があんふぁんてに入会したのは、今浪人生と高校2年の息子たちが2歳と0歳だったときです。社宅に住んでいたので「密室育児」というわけではなかったけれど、自分の世界を少しでも広げたいという気持ちがあり、すぐに「平日あんふぁんて」に参加したり、自宅をその会場に提供したりしました。初対面でも「会員」だというだけで最初から誰とも気兼ねなく話せる雰囲気が、とても新鮮で印象的でした。

その後、会報の編集に何回か加わったり、コンサートのスタッフを引き受けたりしたことは、社会復帰のための良いトレーニングになったと思っています。発送作業は手を動かしながらおしゃべりができるのが楽しく定期的に参加していたのですが、こと数年は仕事が忙しくなり、足が遠のいてしまっています。今のところは残念ながら「読むだけ会員」。最近は街中で赤ちゃんや幼児を連れた人を見ると、大変だったことは忘れて、なんだかうらやましいような気がします。赤ちゃんを乗せた自転車を止める場所がなくて困っている人のために他の自転車をどけてあげたり、電車の中でベビーカーをたたもうとしている人を手伝ったり…今は、それが私のささやかな「あんふぁんて活動」です。

〈「預け合い」が仕事のスタート〉

あんふぁんてに入会したころ、長男出産以前にしていた翻訳の仕事を再開しました。子どもたちが遊んでいる間や昼寝している間に作業をして、郵便で原稿をやりとりするだけなので、何かもうすこし発展性のあることがしたいと漠然と思っていました。そんなとき、社宅の子育て仲間に「預け合い」の話をしてみたことが、今振り返ると私の転機でした。

もちろんそれまでも、病院やちょっとした買い物などに行く場合の預け合いはしていたのですが、自分の趣味や勉強のために子どもを預けるということはなく、これは、あんふぁんてに入った私だから出てきた発想だったと思います。結局「預け合い」にはならず、私だけが預かってもらう形になってしまいましたが、快く引き受けてくれる人がいて、私は隔週一回の「日本語教師養成講座」に通い始めました。

最初は、頭のリフレッシュのための勉強と考えていたのですが、すぐに日本語教育の面白さに開眼し、これは自分の天職だと思うようになりました。養成講座修了後は、自宅でのプライベートレッスン、地元のボランティア教室と徐々に教える場を広げ、現在は民間の日本語学校の非常勤講師として、台湾や韓国などの学生たちに教えています。また、教材や日本語についての本を共著で数冊出版する機会にも恵まれました。そして、昨年4月からは、大学院生としてもう一度日本語教育を勉強し直しています。日本語教師としてこれからもっと成長したいと思っています。

息子たちは「勉強熱心な親だなあ」と半ばあきれています。小学生の時から夜に外出することが多かったり、サッカーの試合も他の親ほどは見に行かなかったりして、淋しい思いもさせてきましたが、私が仕事をしていることや大学院に入ったことは、今大学を目指している彼らにとって、多少は刺激になっているのではないかと思います。もはや「子育て」はほとんど終わりですが、彼らが自分の仕事やパートナーを選ぶとき、プラス面もマイナス面も含めて、私の姿勢が何かの参考になればいいなと思っています。

〈何かを始めたい人へ〉
～かつて幼児を2人抱えて「あんふぁんて」の門をたたいた私から～

今は子どもが小さくて自分のことができなくても、興味があることや好きなことは心に持ち続けてください。そして、機会が来たら周りの人に応援を頼み、迷ったら「やめる」のではなく「やってみる」方をおすすめします。

〝あんふぁんて味〟のおいしい人達

文京区

私があんふぁんてに入会したことは、『五百万円』の宝くじに当たった〝位、値があったと思っている。

北海道の高校を卒業する頃、〝私のような人間が、世の中に出てやっていけるのだろうか。生きていっていいのだろうか。〟と今では冗談に思える程自信がなかった。そのまま家を離れ、寮から学生生活を送り、社会人になった。途中はいろいろあって、これまた情なく、やっぱり『結婚』という舟に乗った方が一生自分で働いて生きていくより楽ではないかと乗った。1回目の舟はひっくり返ったけれど、懲りずにまた乗って娘が生まれた。

娘が3歳になる少し前、新聞記事であんふぁんてを知った。何だかよく判らないけれどうーん、〝私〟っていうのを出していいらしい。子どもを預け合って自由な時間を作れるらしい。こりゃ良さそう！とすぐ入会した。入会前は、昼間娘と2人きりで薄暗い我が家に居るのが嫌で、雨の日もおんぶをして外をさまよっていたのが、ちゃんと訪ねていける目的地がみつかったのだもの、そりゃーうれしくて張切ってお邪魔してみたら、その日はグループ持回りの会報編集作業の集まりだった。古知さんに〝あっあなた　さんていうの、原稿用紙に○○のテーマで○○までに書いてきてね。大丈夫よ、誰でも書けるから〟なーんて言われて、訳もわからず原稿を書くことになったり、自動的に編集作業にも参加することになった。（その頃は、編集グループが幾つかあって、順番に担当していた）

それまで、穴の中でもぐらちゃん親子をしていたのに、突然地上に出てしまった気分。張切って、地域名簿で次々と電話を掛け、池袋近くで自分たちのグループを作った。7～8名位だったと思うけれど、そりゃ遊びましたとも。子どもが？いいえ親が。豊島園という遊園地へ行って、子どもを預かり合って替わりばんこにジェットコースターに乗ったりした……。なつかしいなあ。そう動物園も行ったし秩父に泊りにも行った。書いていて思うけれど、あまり社会的活動はしていないなあ。ただ、仕事につくまでの間、子どもが娘1人だけで、割に交通の便の良いところに住んでいたので、出掛けるのは苦ではなくちょろちょろとよく動き回った。事務局へも時々行き、その時々の作業に参加したり、おしゃべりをしていたが、そこで会えた人たちは〝あんふぁんて味〟のよく染みたおいしい人が多かったように思う。

〝宝くじに当たった位〟という中に、会員の松井さんから『ピッピ』という今はもうない児童書専門店を教えていただいたことや、そこでアルバイトをさせてもらったことから今の保育士の仕事につながったなど、具体的な生活の変化もあった。でもやはり大きいのは、生きていく姿勢が変わり気持ちが楽になったことだ。自分の意見を持つこと、人と違っていて良いこと、学び方はいろいろあること、どんな人間にも生きていく意味があること、辛い時は辛いと言って良いこと、疲れた時は休むこと、かっこう悪くても良いこと、人生は脱線した方が味が出ることなど――

まあ、いろいろ。

振り返ると私の今までの人生で結構重かったのは実母だった。母の時代にもあんふぁんてがあればもう少しやさしくなれただろうに。北海道の山奥の厳しい環境の中で頑張るしかなかったから、性格の強い分ストレートに子ども、つまり私（第一子）にビュンビュンあたってきて大変だった。弟2人にはそれ程でもなかったと私には思えた。ま、そんな母親も10年程前からは痴ほうが進み、徘徊を経て施設へ入れてもらい、現在は病院で人生の最後の時間を過ごしており、気が付けば私も〝更年期〟と最後のおつきあいをしている。そう、この更年期は約10年位と言われているけれど、この期間もあんふぁんての仲間にとても助けられた。ちょっと先を歩いている先輩にも、同じような身体の不調があると聞くと、自分だけじゃないんだと安心できたし、具体的な方法も教えてもらった。私の場合は東洋的療法が良かったと思う。ま、そんなわけで、あんふぁんては〝子育て〟で入り〝更年期〟でちょっとお休みというところです。

でもこれからも〝老年〟という一番ハードな時がやってくるので、形は変わっても私の人生の補助輪としてあんふぁんては不滅なのであります。ハイ。

つかず離れず いい関係

文京区

20歳で結婚し、半年後に長女を出産。結婚して現実に直面し、「男女平等」問題に、急速に目覚め始める。姓（戸籍）の問題、嫁（家制度）の問題、血のつながりへの疑問、男の家事・育児の参加、女の自立（経済力を持つ）など、次から次に疑問が沸いてきて、頭の中はぐるぐると渦が巻いていた。出口のないエネルギーで、よく体調を崩した。

社会から取り残されていくようで不安だった。母親以外の世界が欲しかった。誰かとこの思いを共有したい。強く求めていたから、『あんふぁんて』に出会えた。会報を読んで興奮した。事務局に行った。集まりに参加するようになった。みんな個性的で、強烈で、刺激的だった。本音の会話、1人1人が発しているその存在感に、圧倒された。大げさに言えばショックを受けた。みんながすごいので落ち込むこともあった。刺激やショックは、種だ。やがてそこから芽が出て花を咲かせる。

あんふぁんては私の原点のようなものだ。生きることを真剣に考え始めたスタート地点だ。同じ問題意識を持っている仲間がいる、自分の思いを吐き出せる場がある、それがどこかで支えだった。その仲間・場の存在は、足が遠のいても、体のどこかに存り続けた。

長女が2歳の時、念願の仕事を始めた。3歳で公立の保育園に入れた。普通の子どもがうと言われ、「自閉的傾向児」と診断された。直後、次女を妊娠し、仕事は辞めた。「障害児」ということで、保育園には残れた。就学1年前、普通学級に行くには応援してくれる人達を探した方がいいと助言してくれた親がいた。「障害児も普通学級に」という運動団体と関わるようになった。あんふぁんてからは遠ざかった。両方に関わるエネルギーはなかった。それでも、みんなに会いたくなると、顔を出した。糸が切れない程度につながっていた。

長女の就学6ケ月前に、夫の父が亡くなり、夫の実家で、夫の母との同居生活が始まった。それまでは、夫の親への思いから、1ケ月に1回は泊まりに行っていた。夫の母の嫌なところは見えていたけれど、まあまあうまくやっていた。同居してからは、夫の取り合いになり、いがみ合い、最後には口をきかなくなった。家族より母を取るという夫とはけんかが絶えず、家庭内別居状態になった。夫婦関係も私から絶った。不自然な生活、夫との関係、夫の母との関係に、長い間苦しんだ。

長女は普通学級に入った。強烈なエネルギーを持った子で、困ったことばかりした。毎日が格闘だった。学校とのやりとりもきつかった。今思うと壮絶な日々だった。長女の思いと、こちらの思いが、まったく噛み合わなかった。トラブルばかりだった。長女の様子を見かねた仲間たちが、なんとかしようと、長女に本気でぶつかった。長女は劇的に変化した。まわりと噛み合ってきた。「子どもと本気で向き合っているのか？」私自身も迫られ、変わっていった。それから長女との暮らしを楽しめるようになっていった。

夫は一緒に子育てをする人ではなく、子どもの様子さえも聞いてくれなかった。気にはしていても、手を出して子どもと向き合うことが出来ない人だった。受け止め切れなかったのだと思う。夫も夫の母も、なにもしてくれなかったに等しい。経済的なことと、留守番（別の部屋にいるだけ）はやってくれた。私が外出するのは自由だった。行き先も聞かなければ、文句も言わない。それが夫の、子どもを任せている私への罪滅ぼしのようだった。大変な問題が次から次へと起ったけれど、1人で解決するしかなかった。仲間に助けてもらって、どうにか乗り越えることが出来た。なにもしない夫への恨みが体にへばりついた。

夫との関係は、私の体の底にいつも横たわっていた。気力を萎えさせるほどの問題だった。離婚することが夢になった。離婚したいしたいと言いながら、今年銀婚式を迎えてしまった。25年の重みを思うと、なにもしないのも寂しくて、夫を誘って飲みに行った。そんなことをしてしまう私でもあった。離婚したいという気持ちと、でもまだ夫婦をやっている、矛盾。「お母さんは女としては不幸だけれど、妻としてはしあわせだよ。お母さんのように自由に出来るのは、お父さんだからだよ。お母さんは勝ち組だよ」とは、次女の弁。一面では、その通りだ。でも、しあわせってなに？考え込んでしまった。

一番苦しかった頃、出口のない暗いトンネルにいるようだった。一筋の光を藁にもすがる気持ちで求めていた。発送作業の時、木村さんに、『アウト・オン・ア・リム』を薦められた。その本がきっかけとなって、徐々に暗いトンネルから抜け出していったのだった。あの時期こそ、実はものすごく大きなものを得ていたことに、あとから気がついた。

「なんでこんな辛いことばかり起こるのだろう？」「辛いことがなくなるにはどうしたらいいのだろう？」それが出発点だった。「自分を好きになる」ことから始めた。「人のせいにしない。問題は自分が引き寄せている」「相手を変えることは出来ない。自分が変わる」「許すこと」「自分のやったことは自分に返る」「物事にはすべて裏表がある。どちらを選ぶか？」そういうことに行き着いた。相手が問題ではなく、自分の問題として考えるようになったことが、それまでと大きく違った。

長女の存在も大きい。大変な思いもしたけれど、いろいろなことに気がつかせてくれた。いろいろな人と出会わせてくれた。人の物差しに振り回されなくなった。長女のおかげで、逆に、自由になれた。

夫との問題は、大きな問題として、いまだに在り続けている。私は、いい男女関係を求める気持ちが、人より強いかもしれない。ジョン・レノンとオノ・ヨーコのようなカップルに憧れる。あの2人だっていろいろあっただろうとは思う。子どもっぽいかもしれないけれど、私の夢は、対になるようなパートナーに巡り合って、人生をともにすることなのだ。青い鳥探し、なのかもしれない。

この間土曜サロンに行った。幾代さんと古知さんは言う。「結婚していても孤独だ」「孤独がまずあって、人との関係がある」。憑物が落ちたような衝撃があった。孤独でいいのだと思ったら、気持ちが楽になった。ちがう視点に立てるような気がした。

今年、9・11の平和を祈る集まりに出かけた時のこと。鎮魂のためドラを叩いている、白装束に身を包んだ2人連れがいた。織茂さん夫妻だった。思わず駆け寄って声をかけた。何年も前に織茂さんのお店に遊びに行って、お昼をご馳走になり、悩みを吐き出したことがあった。私の様子を見て、明るくなってすごくよくなった、めでたい、とすごく喜んでくれた。抱きしめてくれた。うれしかった。数えるほどしか会ったことのない織茂さんたちなのに、切れることのないものでつながっている。「これぞあんふぁんて」と思った。

岸さんに会いたくて、書道のワークショップに参加した時も、思いがけず懐かしいみんなに会えた。終わってから飲みに行った。初めて会う人もいた。新しい出会いはいつでもいいものだ。相変わらずみんな個性的だ。話が進むにつれ、体の中の血が活発になっていくようだった。やっぱりあんふぁんてのみんなと話をするのはおもしろい。なにかしら刺激される。深いところにくる。私にとっては、「それがあんふぁんて」だ。

実は最近、若くして子どもを生んだことを後悔しそうになっていた。でも久しぶりにみんなとおしゃべりをして気がついた。私の場合、早くに子どもを生んだからこそ、いろいろなことにぶつかり、考え、いろいろな人に出会えた。あんふぁんてにも出会えた。そして豊かになった。そんな年月があったからこそ、今こうしてみんなといい時間が持てる。後悔どころか、私にはこれでよかったのだ。

勇気を出して事務局に行った日から、20年以上経った。あの頃と今では、男女平等問題についての考えも、かなり変わった。苦悩から抜け出したくて、必死で答えを求めた20年でもあった。「ほんとうのところから発する」ことを学んだ、年月だったような気がする。「ほんとうの気持ち」「ほんとうに求めていること」「ほんとうの関わり」「ほんとうのところから生きているのか？」あんふぁんてから突きつけられていたことであり、私が私に、突きつけていたことだ。

次女が高校を卒業する頃、自分自身の人生に目がいくようになった。満たされぬ心と体を満たそう、行動に移すことにした。それまでずっと真剣に考え続けてきたことだった。自分の気持ちに正直になることにした。

夫の母は現在90歳。介護が必要になった。夫は家にいる時は母親のことはやる。やろうという自覚がある。だから私もやれる。平日は家にいる私がやることになる。そんなに嫌じゃなく、今のところやれている。やっぱり好きじゃないなと思う時もあるけれど、思いやる気持ちもまた出てくる。そんな自分にほっとする。大丈夫これならやれる、と思う。いろいろな経験をして、いろいろなことを感じ、恨みのようなものが少しずつ解けている。夫の母とはいい感じになってきている。

夢中で自分のことを書いてしまった。こんな原稿でいいのかわからない。夫と夫の母のことは私側の言い分だ。あちらもあちらの言い分があるのだろう。どちらか一方だけが悪いということはない、と思っている。

付かず離れず、あんふぁんてはおもしろい位置にある。ある意味、緊張する場でもある。離れがたい魅力がある。意外に甘えられ、でも最後にはキリッとさせられる。それがいい。

今一度語り合い、伝え合う時

横浜市

私は、あんふぁんてが好きです。出会ったすてきな個性の人たち、そして「あんふぁんてな雰囲気」が、いつも私をおだやかな気持にさせてくれます。30年間という長い期間、当初の気持を大事にし育ててきた川崎さんたちの事務局や先輩方の力に感謝すると共に、この期におよんで、あんふぁんてへ書くことを怠けてきた自分を責めてもいます。

私自身はいわゆる転勤族の妻役を演じる生活の中で、あんふぁんての懐に入ることができて本当によかったと思います。はからずも専業主婦型の毎日となった時期には、「働き続ける人間」のはずだった私に、女性たちの心と頭のゆるやかな思いや叫びが胸にひびきました。

夫の退職時まで続いた2～3年毎の転居生活は沖縄から北海道まで、よくもまあこんな非人間的な生活をとなげきながら、一方でーそうは言っても、　はけなげによくやりおおせたものだーなどと、自分を少しはほめてもいました。なぜなら、さまざまな人に会いくるくる目がまわりながら、できることがあればともかく実行していこうという力をあんふぁんてから受けとることができたことは、大きかったからです。

人間って、なんて素晴しいものでしょうか。強くても弱くても、声を出すことが得意でなくても、子どもを産むだけでなく、何かを生み出し創りあげていく力を持っていることをあんふぁんては私に伝え、生きぬく強さを育ててくれました。

どんな保育が欲しい会の「全国の保育室調査」を通じて、古知さんはじめ皆さんとまとめあげたことは忘れられません。今思えば私の仕事はほんの一部で、どんなにか大変だったことでしょう。「あんふぁんてな関係」の中で、子どもたちの元気な声も加わり楽しい時間でした。

この分野では、主に①70年代の横浜でしょうがいを持った幼児の自主訓練会の手助け、②舞鶴市（京都府）での乳幼児の母親やしょうがい児・者との関わり、③首里公民館（沖縄県）の女性史と乳幼児講座運営や市の要綱づくりなど、④神奈川での子育て支援者養成、文科省助成金による「0歳からのジェンダー推進事業」としての地域の子育て支援者と幼・保の保護者の意識調査、「県下公共施設における幼い子どもをもつ親の学習権を保障するための保育室調査」などに参加し、記録の冊子づくりをしました。（これらのまとめは私の所にあります。興味ある方は連絡下さい。Tel & FAX

いつも私は、子どもと一緒の女性たちと共に、その息づかいを感じながらやってきたことを思い出します。

夫の好きな仕事と働き方に付き合う形で、さらにいうならば親子4人で「家族する」ために、東京での公立幼稚園の職場を去った私ですが（この間、息子たちの保育園生活はすばらしいものでした）、いつかどこかで社会と接点を持つ時のために自分を鍛える日々でなければ、などと気負ってもいました。幼児教育関係のものを定期購読したり、保育関係の全国大会に出掛け（引越し荷物の整理も後まわしで）、新しい土地の女性や子どもたちをキョロキョロと見まわしたりなど、それは私なりのエネルギーあふれる時期だったのでしょう。あんふぁんてがいつも近くにあり、全国に自分と重なる人たちがいることが、どんなにか私の心をあたたかくしてくれたことでしょうか。

会報298号で、古知さんが「主婦論争」について示してくださったように、私たちが生きてきた時代（現代史）を今一度「学習」する時がきているように思います。特に「平和」について語り合うことが今ほど求められている時代はないのではと考えます。大江健三郎氏等のアピールによる「九条の会」は、各地で市民たちの手により、小さいけれど力強く動きはじめています。

会報に以前、チェルノブイリ原発事故について書かれていましたが、1986年は私の北欧三国の保育研修の旅と重なり、忘れられない年でした。

何度も平和について会報の文章を気にとめながら、意見を述べることをしなかった自分を恥しく思っています。次の世代に少なくとも「私たちは、心に正直にできることを実践し、自分のことばで、平和について伝える努力をした」といえるような生き方ができたらと、願っています。

あんふぁんてで出会った人たちの顔を思いうかべながら、この文章を書いています。ゆるやかな連帯の場がいくつもほしい時代に、そのひとつが消えてしまわないように望みながら、私の小さな力も少しは輝かせなければと心しています。

「あんふぁんて」という言葉

朝霞市

「あんふぁんて」って、何てステキな言葉だろう。柔らかくて、暖かくて、みずみずしい感じ。何年たってもそう思う。素晴らしいネーミング。入会して20年も経つかな？その間、私は成長してきたのだろうか…。

思えば、良い産婦人科さがしから入ったような…。そして子育てサークルを立ち上げ、そして3人の男の子を育て、今は仕事2つとボランティア生活。でもまだまだやりたい事はいっぱい。できる事は何でもやってやろう！やるリスクより、やらないリスクを考えよう！と最近、いえ、あんふぁんてに入会してから、私はずーっとやり続けているのかもしれない。そして、これからもやり続ける。手始めは、（昨年12月）自宅を開放してのクリスマスお話し会。吉とでるか凶とでるか、やってみなければわからない。

私は、この先も「あんふぁんて」のネーミングのように、みずみずしい女性でいたい。おしゃれでステキな柔らかい暖かい女性であり続けたい。（願望!!）

そしてそして、恋もしたいのです!!今、していますー!!夫以外と。その続きは、又ね。

夫との関係

松戸市

子どもが生まれ、公園とスーパーぐらいしか行く場所がなかった。公園友達と話しても気をつかうことが多かった。そんな時だった、「あんふぁんて」に出会ったのは。あんふぁんての友人と話していると、本音で話せた。

夫のこと、女性問題、社会のこと、教育問題、せまい部屋で子どもはワーワー、私達はワイワイ、会が終わると元気がでた。

長男は当時2才、ちょっと遅れめだった。そんな長男を暖かいまなざしで見守ってくれた。嬉しかったし、ほっとした。

今も時々「松戸あんふぁんて通信」を読むと、当時がよみがえる。通信の中でよく話し合った話題は、「夫との関係」だった。

私も結婚して18年、いろいろあった。お見合い結婚なので、しばらくは本音も言えなかった。ニューヨーク滞在（2年半）から帰国してからの夫の激変（私も）ぶりに不満がつのった。私は家政婦ではないし、私だけで子育てをしているのはおかしい、と怒った。夫は変わらなかった。私は、外へエネルギーをむけた。家族がつらい時期だった。離婚も考えた。

父の突然の死をきっかけに、雪がとけるように変わった。お互いの違い（いたらなさ）を認め合い、思いやれるようになっていった。私も変わろうとした。外へと行動するのをひかえ、家族、特に夫に、目をむけるように心がけた。

家族が一人一人、少しずつ変わった。夫の頭に白髪のまじるのを見ると、年をとったなと思う。身体もあちこちいたんできているし、私も同じ。子どももまもなく巣立っていくだろう。

週末、夫が作ってくれた料理でワインを飲みながらたわいのない話をしているのが、幸せなのかなと思う。いろいろ夫とはあったけど、よきパートナーとしてやっていきたい。

相変らず走ってるよ～

大田区

あんふぁんてに入会したのは今高校1年の息子が0歳児の頃だから、15年ほど前のこと。まだまだ自分自身がコドモで働きたい遊びたい盛りの20代だったのに、恋愛の勢いで付き合って半年後に結婚。その半年後に妊娠して子どもが生まれた。途端に始まった密室育児で「どうしたもんかな～」と思っている頃、ちょうどあんふぁんてのイベント予告が朝日新聞に載っていたのでさっそく出かけたのが出会いだった。

以来、まだ1歳にもならない子どもを連れて色々な集まりに参加し、特集も何度か仲間を募って担当した。当時悩んでいた夫婦の問題や、育児ストレスなんかをテーマにした記憶がある。みんなで集まって子どもを遊ばせつつ編集作業したり、おしゃべりしたりは本当に楽しかった。当時、公園の隣に暮らしながら公園デビューなんぞする気がサラサラなかった私にとって、あんふぁんては出会いの宝庫だった。

今でも不思議なんだけど、あんふぁんてで出会う人とはなぜ会ったその日から旧知のように何でも語り合えるんだろう？社交辞令が苦手で、色々なことに問題意識を持って深く考え、そんな自分の思いを本音で率直に話したいタイプが集まっているからだろうか。よくわかんないけど、そういう気風はあんふぁんての大きな魅力のひとつだよね。おかげで一生の友人にもずいぶん恵まれた。

話を戻すと、子どもが1歳を過ぎた4月からは保育園に入れてライター仕事を再開したから、あんふぁんてのみんなと子連れで遊ぶことは激減した。どうにも折り合いがつかなくて、離婚を選んだのはその子が2歳から3歳になる頃。元夫を威勢よく追い出したまではいいが、家計を助ける程度の細々としたライター仕事しかしていなかった私はいきなり経済的に困窮し、今思うと心労が引きがねになったんだろう、成人アトピーが爆発的に悪化した。

40過ぎた今振り返ると、「あの頃はドン底だったな～」と思うような、かなりキビしい人生の季節が3、4回あったような気がするが、間違いなく当時の私もドン底であえいでいた。それでもあんふぁんての仲間たちに支えられ、助けられた。　ちゃん（野月さん）にはずいぶん話を聞いてもらったし、（井上さん）にはテルミーの『治療』をしてもらったね。最後にはあんふぁんての縁で、定収入のクチさえ回してもらった。特集の原稿の受け渡しかなんかで会った川崎さんに泣きついたところ、当時の事務局だった大山さんが橋渡しをしてくれて、幾代さんの会社で働かせてもらえることになったのだ。

そこで幾代さんは、シングルマザーにとって何よりありがたい定収入と安定した生活リズムを提供してくれたばかりか、「ライターの仕事は財産だから続けなさい」と言ってくれた。その懐の大きさや、女縁ネットワークに助けられたことは今も忘れていない。

生活が安定するとまもなくアトピーはおさまり、社員として働く傍ら細々とライターを続けさせてもらったおかげで、やがて自分がやりたかった雑誌編集の仕事に就けることになった。2年ちょっとを経て幾代さんの会社を『卒業』するまでには、実家に近い新築アパートに越したいが金がなかった私は、1室をあんふぁんての事務局に使ってもらって家賃を補助してもらったこともあった。そんなこんなであんふぁんてには足を向けて眠れないほど恩義があるのに、思えば何の恩返しもしていない私（申し訳ないっ！）。

とにかく猪突猛進タイプで母親向きとは到底言えない私は、常に自分がやりたいことに向かって全力疾走で日々を生きてきたように思う。雑誌記者の仕事は私にピッタリでずいぶん入れこんだが、それ以外にも仲間と劇団を旗揚げし、週3日勤務の社員という特別待遇を融通してもらった。

あれは何回目のドン底だったか、子どもが小学校2年の頃に芝居に入れこみすぎて社員の立場を追われ、ほぼ同時期にひどいトラブルが起こって劇団を追われ、子連れで3度目に移り住んだ住まいまで追われ、どこで何をして食っていけばよいのか、これからどうやって生きていこうかと途方に暮れた季節があった。

この時もあんふぁんての仲間に救われた。あちこちに電話をかけてSOSを発信した時、1、2度しか会ったことのない大田あんふぁんての生田さんが「学校も学童も良いから引っ越しておいでよ」と声をかけてくれたのだ。これでよっしゃと職住接近を思いついた私は、大田区にあった雑誌社の社長に「今度は真面目に働くから」と頼みこんで無理やり社員に復帰させてもらい、再び大田区で雑誌づくり

に燃える日々を再開。ここは小さいだけに家族的経営というか、宴会も社員旅行も、時には取材旅行も子連れOKのアットホームないい会社だった。子どもも何かあれば気軽に会社に来られるので、ずいぶん安心感があったらしく、本当に恵まれた日々だった。

その後、30代半ばにしてさらなる大恋愛の日々が始まったり、独立してフリーランスになったり、思春期を迎えた子どもと家事分担や思想信条をめぐって対立したりと、まぁ色々あってここには書ききれないが、とにかく生きること愛することに忙しく、あれやこれやの関心事に忙しく、衣食住全般に浪費傾向のある私は生活費を稼ぐことにも忙しく、あんふぁんてとは遠ざかりっぱなしだった。

それでも、再び『戦前』に突入したかのようなこのキナ臭い時代に、声を上げれば応えてくれるあんふぁんてや川崎さんの存在は、私にとって本当に貴重だった。今、私は42歳。やりたいこと、やらねばならぬことが山ほどあって、相変らず突っ走っている真っ最中だが、ニッポンは、世界はどこへ行こうとしているのかと暗雲をヒシヒシと感じる。こんな時代だからこそ、この貴重な仲間たちをつなぐ糸を途切れさせたくない。そのために自分に何ができるか、まだわからないが、とりあえず今はそんなふうに思っているところだ。

心を開いていく場

札幌市

初めての妊娠を、22年前にポルトガルの闘牛場前のイワシを焼く屋台の前で直感した。5年間在住したドイツから帰国する前の、知人家族と廃棄寸前のポンコツ車での旅だった。

東京で第一子出産直後、あんふぁんて大田区グループと出会う。6年間で春夏秋冬の季節に4人の子どもを授かった。30代から始まった子どもたちとの日々は、あんふぁんてでの活動で苛立ちや楽しさを分かち合えた。主役はいつも自分たち。自分らしさの追求に限りなく時間を費やし、行動を起こした。今振り返ると、「エネルギーが充満していた」と実感できる。

30代後半で札幌に転居。公園友だちが共同保育化し、第四子の産前産後も乗り切れた。同時に写真活動を再開、『女たちの写真展』を企画・運営する仲間にもめぐり合う。しかし、体力の限界もあり新作の写真を創り出せず、旧作の写真の再構成にとどまり意欲が急速に低下していく。

40代に入り、「中断されない時間」を取り戻し、①体力維持のための武道カンフー②東京で闘病生活を送る父を想う病院ボランティア③性別役割分業をビデオ制作する活動を3本柱とした。異年令の人々から生活の知恵を教えられた。

40代後半、在宅介護員として収入源の部分確保を得て、50代前半となった今、介護支援専門員としての仕事が始まった。

振り返ってみると、夫とは学生結婚して30年。最初の10年は学生同士の2人で身軽な生活。私は働き、写真を撮り、作品を発表する場をドイツで得た。次の子育て期の10年、つれあいが働き収入を確保。現在は、お互いを補いつつ働いているが、最近の10年間はつれあいが更年期状態で、ひたすら気持ちが下降しており、登校拒否（仕事拒否）を毎日口走る。そんな姿をしっかり見ているのか、子どもたちは辛い思いを抱えていても、学校への道のりは遠のくことがなかった。私にとっては「不幸中の幸い」と、なぐさめられた。

父母たちとの別れも、ここ10年間で体験。残るは、私の母。母の存在は微妙な影を私に落とす。札幌と東京と離れており、年1回会えればOK。70代後半で、「10年は今後大丈夫」と思うと、やさしい言葉がけもつい逸す。お説教の聞き役に撤することもままならない。

子どもたちも春には、在宅は高校1年生となる次男ひとりだ。そして、私は生まれ故郷の銀座2丁目に戻り、「遊びの旅」に出かける支度ができるようにと充電中。

自己表現が苦手だった私。「こころ」を他者へ開いていく場を提供してくれたあんふぁんてとの出会い。彼女たちからもらった数々のエネルギー源に、「ありがとう!!」と叫ぶ私がここにいる。

第三期の自分

杉並区

私にとってのあんふぁんてって、第2の自分を築かせてくれた「基礎」かなって。いろいろな事を考えさせてくれたり、学んだりしたところである。今も大切な心の場である。第2の自分って、結婚して子どもを産んで、結婚ってなんか「自分の主張をしてはいけないところで、居させてもらっている所なの？食べさせてもらっているから言いたい事を言ってはいけない。夫に対して小さくなってないといけないの？」と感じ始めた頃から今までの自分かな。私はこれから老後の「第3の自分」を歩み始めている。

第1の自分というのは結婚する前までの自分かな。まだ弟が居ない小学校低学年の頃の私は1人で留守番が多かったからか、一人遊びが上手で早くから自我に目覚めていたようだ。言葉は出ないけれど行動で意思表示をしたり、反発したりしていた。回りの大人たちは「強情で可愛くない子だ、この子は」という視線を私に向けているのをよく感じていた。でも幼児の頃に、皆の前でダンスをしたりして愛想をふりまいて拍手してもらっている私の姿を、かすかな場面であるが鮮明に記憶しているので、根っからの強情で一人遊びが上手な子ではなかったとも思っている。

貧しい農家で没落している家なのに、男たちや小姑の母が威張っていた。嫁であるおばたちはものを言えない状態で、何か言おうものなら即座に「お前は黙ってろ！」と灰皿が飛んでくるという超封建的な家だった。それは私が高校を卒業するまで続いた。おじや母の態度も嫌だったけれども、言われっぱなしのおばたちも嫌だった。そういう私も養育してもらっている身で、何も言えないのだ。けれども心ではいつも反発していて、それで自然と口をきかない子で、大人たちに左右されないぞっと目だけがギッと睨んだ可愛くない子に育っていってしまったのだと思う。

そんな子も大人になって、病を患ったりして他人の親切に触れて、だんだん素直に愛想をふりまく女性に変身したようだ。それでも、就職したら、ウーマンリブになろうと思ってはいたけれども、適齢期だ、仕事もしたくないなあ、結婚してしまおうかと魔が差して結婚してしまった。優しい夫と思った男は、実は自分だけのマイホームを大事にする人だった。2人で話し合いなんて考えも及ばない人だったのだ。それも自分たちのマイホームが幸せであれば他の人はどうでもよいという。最初は子育てで忙しくいろんな事を思っている暇がなかったが、結婚3年ほどして人に左右されないぞっという私の生来の強情な性格が蘇ってきた！　幼稚な2人がぶつかり合う。

いろんなそれまでの不満をぶつけたりして夫にギッと睨んだ目を向けてしまうので、当然、私と夫の諍いが始まる。しかし、口をきかなくなって修羅場になっても、口をききだすと2人とも能天気に普通に戻る。その喧嘩して仲直りをしての連続で、長女によく、私たち親は叱られたり慰めてもらったりした。学習能力がお互いに乏しいのでグチっては悶々としているときに、私はあんふぁんてと出会ったのだ。

あんふぁんてと出会って、私は「自分らしく生きるってよいことなのだ。自分を主張して行こう」と思った。相手と話し合いをしていくことが大切かなと、あんふぁんての会員の人たちと接しているうちに相手とのコミュニケーションをとることが必要と、会話を通して自分で学んだように思う。少しずつだけれども自分が成長していったと思う。

出会いはあんふぁんてだけでなく、子どもの幼稚園や保育園、学校等のいろいろな人たちや、母の介護でいろんな方々の援助を受けたりしての出会いがあったからで、そういう出会いを大切にするってことを気づかせてもらえたのは、「あんふぁんて」の会だと思う。第2の自分は20年近く経た今、すごく充実していると思う。反省の部分をいつも背負って歩いていて、結果はけして良いものではないかもしれないけれど、今の生活、今の自分に満足している。

今私は、第3の自分に向かって歩んでいこうとしている。私の第3の自分とは、「老後の自分」である。あと何年生きられるか分からないけれど、自分の老いを見つめて私らしく生きていきたい。子どもは大きくなったけれど、違った意味で手がかかる。今のほうが昔の子育てよりずっと長い、永遠のような気がする。子どもが社会人だからこそ難しい問題が山ほど出てくるのが、今の世の中なんじゃないのかな。本当に親子で怖い事件が多いよ。まだまだ、あんふぁんての仲間は私には必要である。あんふぁんての会が解散しないで存続していけるように、何とか微力で申し訳ないけど、関わっていきたいと思う。

ふたたび暮から出発

川崎市

息子は23才、私は60才。結婚10年目、避妊をしない一度でできた子でした。生きるための最後の賭をしたのでした。その時できなかったら、それきりだったかもしれません。

高度経済成長の世に反抗して独自の生き方をしていましたが、社会とのつながりが持てずに行きづまっていました。「子どもを持つということは、絶望的な状況を全身で受けとめ、立ちあがらなければならないということ。それから逃げることはできない」と思っていました。又、そんな事は私にはとうていできないと、私にできることは都会のここにあるもので創造的に精いっぱい自給自足に近い生活をすることと、思っていました。

しかし、ガンバレばガンバルほど社会から遠ざかっていく感じがしていました。だから、子どもをかけ橋にして私は社会人として産声を上げたかったのだと思います。そしてそれを支えてくれたのが、あんふぁんてだったと思います。

昨年、義父が90才で亡くなりました。2年半病気の間、世間に逆らい入院もさせず、鍼灸と食養で最後も自宅で看取りました。その事で、思いもかけず私たちの生き方が認められたように思います。うちのまわりで、ちょっとした玄米流行（はやり）もおこりました。

葬式は金もないことだし、昔ながらの自宅でやりました。これも思いがけず、近所のおばあちゃんたちが活き活きと炊き出しをしてくれたり、行き来のない親類の交流などができ、喜ばれもしました。

ほっとした所へ雨漏りがし、隣のアパートから見てみると、コールタールがはげてゴミ箱をひっくり返したようなトタン屋根だ。もしかして白蟻も…。今から思うと笑っちゃうほど難問がとびこんできました。—今も続行中ですが—

でもその度に人に助けられ、人の素晴らしさに出会っています。「道に迷い、立ち止まっていたら、友達が突然輝いて道を教えてくれた」。そうだ、平和も愛もころがっているのかもしれない。私の目がふし穴でなくなったら。

自信の源

さいたま市

「こうだったらいいのにな！」と思う事をあきらめないでやってみよう。そう思えるようになったのは「あんふぁんて」のおかげ。

①ひとりで子育てしていた頃、預け合いを始めて友達ができました。

②講師を呼んで会員と2人で公民館で講演会を開きました。

③子どもを保育園に入れました。

④産休代替で高校の教師になりました。

⑤教員採用試験に合格しました。

⑥高等学校の家庭科の授業に子育ての現役会員親子に参加してもらいました。

⑦会員に授業で「読み聞かせ・手遊び」を生徒に教えてもらいました。

⑧会報に原稿を書くことで、自分のことを整理することができました。

私の原稿を読んだ感想を聞かせてもらえてうれしかったです。書くことで、自分を支えることができたと思います。

この20年間、元気が出ない時は「あんふぁんて」の友達にほめてもらい、エネルギーの出し方で迷う時は、知恵を貸してもらってきました。近頃では娘もあんふぁんての仲間に興味を持ち、訪ねて行ったりしています。

あんふぁんて30周年フェスティバルで「自分を表現しようよ」と言われて、「自分で創った歌を唄いたい」と思いました。きっと、いつか出来ると思います。それなりの確信を持って「きっとできるさ」と思えるのは、自分で行動する心地良さと自信を得ることができたからだと思います。「こうだったらいいのにな」を実現するためのきっかけが、私にとっての「あんふぁんて」なのです。

正採用教員になって13年ですが、この間職場の空気になじめずに悩んだ時、私が安心して思ったことを言える「あんふぁんて」に何回も帰ってきました。ちょっと休憩。そんなふうにして現在の私がいます。

会報に育てられた私

府中市

私が「あんふぁんて」の会報『あんふぁんて』を初めて読んだのは、25年前。「あんふぁんて」に入会問い合わせをしたところ、趣意書と一緒に送られてきたものだった。創刊当初「生活情報誌」と銘打っていた名残で、まだ会員間では「情報誌」と呼んでいた。

私が「あんふぁんて」の活動を知ったのは、それより数年前に遡る。まだ大学生だった頃、新聞の記事で子育て中の人たちのグループが活動を始めたという記事を読んだのだ。その時は自分がそのグループに関わるようになるとは夢にも思わなかったが、なぜか頭の片隅に残っていた。そして、いざ自分が子どもを産んでみたら、社会から隔てられた閉塞感や夫との生活や気持ちのズレなどを感じ、自分も何かしたい、しなければ…という思いにかられ、ちょうどベビー雑誌で連絡先を目にした「あんふぁんて」に入会問い合わせをしたという訳だ。

サンプルとして送られてきた会報で目にとまったのは、「反戦あんふぁんて」というタイトルのコーナー。子どもと暮らし、おしめを洗いつつ（当時はほとんどが布オムツだった！）、生活の中で反戦を考える女たちがいることを知り、新鮮な驚きを感じた。

また、小学校入学を前にした子どもを対象とする就学時検診のことも、会報で知った。本人や親の意志を無視し、小さい頃から子どもをより分けていく国のやり方には憤りを感じたし、早く知ったおかげで、わが子の3歳児検診や就学時検診を無事拒否することもできた。就検拒否の行動を取ることで、私のその後の学校とのつきあい方の方向性が決まったし、我が子の教育に対する責任についても、自覚できたと思う。子育て中の知り合いも無く、情報源の少ない私にとって、『あんふぁんて』はまさに生きた子育ての辞書だった。

私の文章初登場は、「からだのおしゃべり」というコーナーに関連した、避妊リングの使用についての投稿だった。前の号の記事を読み、自分もリングを入れてから不正出血などがあり気になっていることをなどを事務局に書き送ったら、それがそのまま掲載されていた。ちょうどその号の発送作業を手伝うために子連れで事務局へ行ったら、当時事務局スタッフをしていた大山　さんから『あの手紙、載せたから』と言われた。びっくりしたが、実名で自分の体験や考えていることがそのまま情報誌に載ったことで、発信者として腹をくくることができ、それからは、自分の考えを自分の責任で発信していきたいと思うようになった。

この「からだのおしゃべり」コーナーやその他の投稿をきっかけに、女の身体のことを女である自分達がもっと知ろうということになり、自分達の出産体験をまとめた『お産サイドブック―生んだ人から生む人へ』も生まれた。私が入会してすぐ第一回の「出産アンケート」が送られてきたが、それから紆余曲折あって、実際に本が誕生したのは6年後、私が2人目を出産する直前だったが…。

その後、雑誌「ぴあ」の創刊などをきっかけに、世の中は「いつ、どこで、だれが、何をする」というのが情報であり、「あんふぁんて」の情報誌は会員のおしゃべりばかりで情報とは言えない、という意見が寄せられるようになり、『あんふぁんて』のことは、「情報誌」ではなく「会報」と呼ぶことになった。

子育てする上でもう一つ参考になったのは、学習指導要領の改定内容をわかりやすく解説してくれた「学校特集」だ。最近の改訂より二回ほど前の改訂の時で、小学校の低学年の社会科と理科がなくなり、生活科が導入された時のことだ。数回にわたり、現役の小学校の先生に投稿してもらったその特集は、子ども達の知的発達の順序を無視して行われる学習内容の改訂によって、かえって子ども達が苦労したり混乱したりしてしまうことなどがわかりやすく説明されていた。

自分が特集を担当して一番印象深かったのは、「離婚」特集。当時地域で子連れで集まっていたメンバーで担当したのだが、編集作業をしているうちに、私を含めた何人かが夫と離婚について話し合ったりしていたことがわかり、しかも、特集完成後に夫の浮気が発覚し一気に離婚の危機に瀕したメンバーまで出るおまけ付き。でも、このおかげで私は、夫とのことや嫁姑問題などを、世間体を気にせず本音で話せるようになったのだ。

会報『あんふぁんて』については、まだまだこんなものでは語り尽くせないが、私は、『あんふぁんて』とその文字の向こうにいる各地の多くの会員によって育てられてきたことを実感する。ありがとう、300号。

私と息子とあんふぁんて

練馬区

一番初期に出た「お産サイドブック」を手にした時が、あんふぁんてと私の出会いだった。助産院で産みたいキモチが強くなり、たぶん息子(現在18)を産んで1年ほどして入会したはずなのだが、活動に参加する間もなく熊本に転勤が決まってしまった。

その間に、最初の投稿をしたことを今でもハッキリ覚えている。「私は子どもが好きじゃない（一般論として）」と書いてしまったのだ（今は違うけど）。毎月届く会報には本音が満ちていたから、それが私に思い切った言葉を吐かせた。そして本音も悩みも愚痴も吸い込まれるように受け入れられる不思議な感じ。それがあんふぁんてだった。

2年の地方暮らしは、社宅の中で当たり前のように行われる預けあいで私は半分満足し、だからといって思い切りやりたいことができるわけではない不満で揺れていた。東京に帰ってきて、子連れであちこち出歩いたり、飲み会で楽しんでいるあんふぁんての仲間を見て、私も何かできるんじゃないかとワクワクしたものだった。

そして第二子を妊娠しながら会報の編集に誘われるうちに、流産。半ば妊娠を諦めて、一人っ子だっていいやいっ！と強がって結局そのまんまになってしまったが、やはり半分後悔。息子は喘息もちだったから、子育ては大変だったけれど、18年経て歳をとり、いろんな子どもをみるうちに、彼らがくれるパワーとエネルギーに脱帽せざるを得ない。私は中途半端のきわみだなぁ。

流産したあとは、やりたいことに必死になって、子連れで小劇場の芝居もやった、チョー疲れたけど楽しかった。どこにでも息子をつれ回し、劇場に連れ込んで膝の上で一緒に芝居を見せるむちゃもやった。周囲に流されて幼稚園に入れてしまったから、働くことに憧れて、これまた必死で預け先を探して仕事もした。これまたチョー疲れ、息子が喘息になるたび職場に「お母さん、苦しい」と電話があると、こっちの胸が潰れるほどに心配して飛んで帰る。そんな繰り返し。息子は、私に側にいて欲しかったんだろうなぁ。あんなに小さな身体で発作に耐えていたことを思うと、これまた後悔に苛まれる。ごめんね。それでも仕事してみたかったんだよ、そう言い訳するしかない。そしてしばしば凹んだ私を見守ってくれる貴重な友人を得たのもあんふぁんて。感謝です。

息子の喘息は小学校6年まで続いて、それから徐々に終息していったが、薬を絶対に飲まない奴だったから、民間療法を渡り歩いて、困った時だけ医者に駆け込むという綱渡りのような治療だった。でも、3才から小2まで過ごした練馬区に再び引越して、中学で昔馴染みの友達と再会すると、息子は水を得た魚のように喘息を忘れていった。高校に入ったら学校が楽しくて1日も休まない。そうして、もう親離れは近い。

何を書こうか迷っていたが、書いてみたら息子のことが多いのに自分でもびっくりしている。つい最近までヘソの緒が繋がっていたかのような寂しさだ。もっとアイツのことを大事にしてやりたかったけれど、いつもいつもその時々、私は何かに夢中になっていたから、それなりに育ってしまった。失敗とか成功とかそんなふうに考えたくはないけれど、ぎゅっと抱き締めることのできた感触はもはやいい思い出。

この2年間は、父の交通事故死以来、心身を病んで1人で暮らせなくなった母のケアーに忙しく、実家と自宅を往復するのに疲れ、ついに私まで具合が悪くなって半病人だが、あんふぁんての会報を手にするたびに、何かを求め、悩み、考えていた自分の分身を見て元気をもらう。親は老い、私もそれなりに中年となりいずれ老いる、子どもは成長の盛りを迎える。若さってのは神様に与えられた特権だなーと振り返りつつ、先の不安を誤魔化しても時は過ぎる。あせる。

ひとまず、今私が為すべき事は自分の心身の気力建て直しと、自宅から2時間の地に暮らす母親の不安を受け止める事。もはや看取りの領域に近づいた。その時を乗り切るためにも、私にはあんふぁんてのパワーがまだ必要。会報だけでもなんとか続いて欲しいと切に願ってやまない。（自分で旗振りができないくせに、欲張りだと自覚しつつ）

心の真ん中にあんふぁんて

世田谷区

出逢ったのは25年も前。振り返れば、まさにその後の人生が大きく変わった出逢いだった。20歳で長女を産んだ時の不安、孤独、焦燥感をまざまざと思い出す。「結婚して子供も産まれて幸せね」と、女友達は言う。「母となったからには子供第一」と、母親世代は言う。そうだなと私も思うのだが、どうしたことかちっとも幸せじゃなく、子供第一に考えるあまり何から何まで心配で、良い母親になろうと努力すればするほど追いつめられていく。夫は仕事で忙しく、ましてや育児のことはまかせきり。私は本当に誰にも相談できず、マンションの中での育児に疲れ、夜泣きし通しの子供をベランダからほおり出したくなり、鬼のような母という新聞の見出しが目の前にちらつく日々だった。

その時、雑誌クロワッサンに掲載されていた「密室育児からの解放」という文字に、私は釘付けになった。これは、私そのものだ！誰もわかってくれない苦しみが私一人だけではなかったという安堵感と、その人たちに逢いたいという強い気持ちが湧いてきて、本当に一筋の光が差し込んだように目の前が明るくなったことを覚えている。

それが、あんふぁんて。仏語で出産する、創造するという言葉が、何とも軽やかにふんわりと包むように響く。出逢った人たちは、今までの20年の人生では想像すらつかないほど個性的な人たち。まず、自分の思っていることをはっきり言う。「世の中では」「フツーは」「母親として」がない。「自分はこう思う」とか「こうしたい」とか「そのためにどうする」という風に話が進んでいく。こんな女たちがいたのか、ガーン！すごい衝撃だった。

そうか、世間的な良い妻や良い母が基準じゃないんだよ。大事なのは、私がどうしたいかなんだよ。こんなこと学校では教えてくれないし、周りの女性にもそんな不謹慎（世間では）なことをいう人はいなかった。私が「たまには映画でも見たいなー」「一人でゆっくり買い物したいなー」とつぶやくだけで、なんてワガママで、母親失格で、子供がかわいそう、と糾弾されるだけだった。ところが、あんふぁんてでは「じゃ、子供を預かるから行ってきたら」と簡単に言うので、またまたガーン！えー、いいの？母親が自分の子供を置いて遊びに行ってもO.K.？他人に子供を預けても？「イライラした母親より、楽しい気持ちでいる母親の方が子供にもいいんじゃない」、と目から鱗の発言に、コレダ！と楽しい子育ての道がまっしぐらに見えてきた。

さっそく子育てグループをつくり、預け合い、育て合い、助け合いながら、2人目3人目と出産。30歳までの10年間の子育て期間を心底楽しむことができた。それは、子育てしながらでもやりたいことをできる人間関係を築くことができたからだろう。思い出すのは30歳で働き出した時、保育園のお迎え時に常時5人位の代理の名前が書かれていたこと。どうしても迎えにいけない時は、この人がダメならこの人と、電話しては誰かしら行ってもらい何とか乗り切ることができた。

その後、33歳で離婚し、編集の仕事について忙しくなり、あんふぁんてとのつながりも遠くなり、今に至ってしまった…。昨年暮れに、子育て時代の仲間2人と大学生・社会人となった子供たちと忘年会を開催。子供たちはそんなに憶えていないけど、母親たちの話ぶりで、みんないっしょくたになって遊んで食べて寝て、大きくなったんだね、と嬉しかった様子。20年以上たっても昨日のことのように子供たちの泥だらけの笑顔を思い出す。なんて幸せな子育てだったんだろう。そして今でも友達でいられるのは、あんふぁんてを通じて知り合った4人だけ。うーん、ここまで書いて、いかに私の人生があんふぁんてで形づくられていたかに気づいた。

20歳で出逢って、私は初めて自分でモノを考え、自分で行動することを知った。あんふぁんての多くの女性たちに刺激を受け、そんなこともあんなことも考えてみたことなかった、と衝撃を受けつつ、新たな世界が開けたことを感じていた。25年後の私は、子育ては卒業し、中高年としてこれからどう生きていくかに直面している。でも、あんふぁんて仲間に逢うと元気になる。みんなあきらめていないし、楽しんでいるし、自分で切り開こうとする強さも、小さなことにこだわらない大らかさもある。私にとって、一生あんふぁんては続いている。何かを生み出すことのできる人生を、これからも。感謝を込めて。

あんふぁんての歴史（Ⅲ）　—主なことがら、集まり・イベント、会報—

１９９０年１月～２００５年３月　（ いわば「あんふぁんて」後期 ）

1990年 1月号・〈 ザ・保育園 〉の特集。
4月 ・参加費を５００円に値上げ。
5月号・〈 幼稚園 〉の特集。 連載コラム「 学校を考えるシリーズ 」。
7月号・〈 息子の登校拒否について 〉の投稿。
11月号・〈 学校って何だろう？ 〉の特集。 12月号・〈 夫婦別姓 〉の特集。
1991年 1月号・連載コラム「 地球を考える 」。 4月号・〈 戦争と平和を考える 〉の特集。
7月号・〈 転勤 〉の特集。 10月号・〈 アレルギー 〉の特集。 12月号・〈 嫁・姑・家 〉の特集。
1992年 3月号・〈 母親友達 〉の特集。 7月号・〈 離婚 〉の特集。
11月 ・連続ミニミニ講座〈 あんふぁんてティーブレイク 〉開始。
1993年 1月号・〈 遊べない子ども達 〉の特集。
4月 ・「 子どもと行くはじめてのあんふぁんてコンサート 」（ 国分寺市いずみホールにて ）。
7月 ・事務局が練馬区桜台の津賀宅に移動。
9月 ・大田区グループが『 子どもに手を上げたくなる時 』の著者＝橘由子氏講師の区講座を企画。
10月 ・『 ひとりで子育てしないで—グッバイ母親ストレス— 』発行。
12月号・〈 老親問題 〉の特集。
1994年 5月号・〈 いじめ 〉の特集。 8月号・〈 公共施設の現状と母子福祉 〉の特集。
9月 ・大田区グループが橘由子氏講演会「 セックスレスと夫婦の関係 」を主催。
11月号・〈 地域で子育てしたいのに 〉の特集。 〈 私はオッサン 〉投稿に反響あり。

1995年 3月号・緊急連載コラム「 阪神大震災 」。
3月 ・事務局が再び神楽坂の幾代宅へ移動。 4月号・〈 夫婦の性 〉の特集。
11月 ・あんふぁんて２０周年記念イベント「 こころのインターネット、キーワードはコミュニケーション 」（ 東京池袋教会にて ）。
1996年 5月号・〈 原発 〉の特集。
7月号・連載コラム「 私のお産体験聞いて下さい 」。
10月号・連載コラム「 病める時も健やかな時も 」再開。 12月号・〈 3歳児神話は誰のため？ 〉の特集。
1997年 1月号・〈 公園 〉の特集。 11月号・連載コラム「 家庭科探検隊 」。
1998年 1月号・〈 女の友情 〉の特集。 4月号・〈 「AC（アダルトチルドレン）」って何？ 〉の特集。
4月 ・グループ「 パソコンであんふぁんて 」の呼びかけとホームページ委員会立ち上げ。
9月 ・幾代さん６０歳バースデー記念交流ワークショップ「 ハミングバード 」（ 下北沢タウンホールにて ）。
10月号・〈 不登校 〉の特集。 連載コラム「 角谷千絵のお産日記 」。
10月 ・としま・あんふぁんて連続講座「 あんふぁんてが考える少子化ってなあに？ 」。
11月 ・子育てに悩む人が自分をとりもどすための託児付ワークショップ（ 東京ウィメンズプラザ祭りに参加 ）。
1999年 1月号・〈 少子化 〉の特集。 連載コラム「 ＳＡＹ・性・生コーナー 」。 2月 ・ホームページ開設。
5月 ・『 女性関連施設における保育室の利用の現状調査とこれからのあり方の研究 』の冊子報告書を東京女性財団へ提出し、助成金を得る。
10月号・連載コラム「 やっぱり神戸が好き 」。
11月号・〈 年金第３号 〉の特集。 12月 ・子育て広場「 トライアル 」スタート。
2000年 3月号・〈 母と娘 〉の特集。 4月号・〈 出生前検診って何？ 〉の特集。
8月 ・国立婦人教育会館のフォーラムでロールプレイの託児付ワークショップ。
9月 ・事務局が麹町の川崎実家へ移動。
10月 ・しゃべりＢＡワークショップ。 12月 ・小さな親子コンサート（ 神楽坂の幾代宅にて ）。
2001年 4月号・〈 学級崩壊 〉の特集。 5月号・〈 音羽事件 〉の特集。
10月号・〈 子どもの自立 〉の特集。 グループ「 平和を考える会 」の呼びかけ。
2002年 3月 ・東京都の助成金を得て『 21世紀のお母さんお父さんに贈る—お産サイドブックⅡ 』を発行。
3月号・〈 テロ事件 〉の特集。 7月号・〈 男性の出産への関わり方 〉の特集。
10月 ・厚生労働省の少子化社会に対する意見募集に意見書を提出。
2003年 2月 ・「 ママ友達 」ワークショップ&講演会。
3月 ・東京都知事候補者たちに公開質問状提出。
3月号・〈 再就職 〉の特集。 5月号・〈 週5日制でゆとり教育なの？ 〉の特集。
6月 ・「 少子化社会対策基本法 」に対する国会ロビー活動に参加。
8月号・〈 教育基本法改正 〉の記事。 10月 ・会報を増頁し隔月発行に。
10月号・〈 長崎の少年事件 〉の特集。 12月号・〈 年金改正 〉の特集。
2004年 4月号・〈 幼保一元化 〉の特集。 6月号・〈 性教育&ジェンダーバッシング 〉の特集。

いてくれるだけで「幸せ」？

国分寺市

あんふぁんてに入会したのは、長女が幼かった頃です。今は子連れサークルもいろいろありますが、その頃は少なく、あんふぁんてのようにどんな分野の話もできる、聞いてもらえるグループは、今でも他にないと思います。我が子も今は18才、16才、14才、12才となりましたが、まあとにかくいろいろあってここまできたなーという感じです。

子ども達がまだ小さかった頃、「子どもが大きくなれば…」と期待していたものがありました。きっと手伝ってくれて家事も楽になるだろう…、連れて行かなくても1人で行けるようになるか、手間もかからなくなるだろう…、自分の時間もできて、好きなことをできるようになるだろう…、などと。しかし、それは大きな間違えでありました。大きくなったらなったで、手伝ってほしい時には部活やバイト、寄り道などで家に居ない。帰りは遅い上、携帯を持っていても連絡しない。連絡つかない（都合が悪い時、悪い相手を受信拒否して通話中モード）。部屋は、こっちが手をつけようものなら怒るので放っておくが、足の踏み場もない程散らかっている。夜は電気をつけっ放し、化粧したまま、めがねをかけたまま寝ている。行動だけでなく、口も達者になり、「親子の話し合い」なんてものでなく、きれるか、言い争いになってしまう。帰りが遅く寝不足が続くと、学校で爆睡、しまいには休む。こっちはどうしてくれる！と言いたい。寝不足でも休むわけにいかないし、疲労蓄積状態。しかも年々お金がかかるので私の仕事は増やす一方。自分の時間はなかなか持てない。更に夫は1年半も仕事につかず酒を飲んで、のらりくらりの無収入状態。私1人で何でこんなに頑張らなくちゃいけないんだろう、と抱え込んでいた時もありました。全く期待はずれの連続です。まあ現実はこうなのか…と思う一方、他の家の子とくらべてしまったりもします。

そんなへ理屈をこねたり、長々と語っているのが楽しい青春も、やや落ちついてくるものです。と思うと、待っていたかのように、次の娘が突入するのであります。結局いつも誰かが心配をするような事をくり返しているわけで、母は辛いところです。我が子は2才違いなので、只今毎年卒業式、入学式が交互にあり、同時に毎年受験生がいます。小さかった頃は、4人居るからといって4倍のお金がかかるわけではなかったけれど、この年令になってくると、人数分のお金がかかり、子育てはやっぱりお金がかかる、と実感しています。このままだと、自分の老後が心配です。こんなにもお金がなくなって、長生きしたら大変かなー？とか。

最近では、先日私の父が入院しました。その7年前にすでに脳梗塞で倒れ右半身まひで、車いす生活で、入浴等は母が世話をしていました。主治医の説明は、すでにガン末期ということでした。

父はわがままで頑固で、酒乱で暴力はふるうし、お金が毎日飲んだつけを払いに回り手持ちはなく家に入れず、全くろくでもない人でした。姉も母も「早く死んでくれればいい」と本気で思っていました。家の事は嫌な思い出しかありません。そんな父も年老いてきておとなしくなっていたので、いざ余命わずかとなると、いくつかの場面が思い浮かび、父を何故か、かわいそうな人に思えてきます。どんな父であろうと私は母と父の子であって、今こうして家庭を築き健康でいられるのも、父に感謝しなくては、と思うのです。本人はあれだけ好き勝手に生き、さんざん迷惑かけてきて、「オレはいつ死んでもいい」と言ってるので、きっと思い残すことのない「良い人生」だったろうと思います。

父が入院したので母は世話をしないで済むのでほっとしていると思ったら、あんな父でも居ないと、不安だったり1人で恐くて眠れなかったり、血圧が上がったりと体調が悪いようです。「居なければ、せいせいする」なんて言っていた母なのに…。夫婦ってそんなものなのかもしれませんね。実際私も正直言って夫の有難さをああまり実感していませんが、いざ居なくなったら、きっと母のようになるだろうと思うのです。

父や夫に限らず、心配をかける子でも元気で居てくれるだけで、生きていてくれるだけで、気づかない「幸せ」なのかもしれません。

あんふぁんても、続いている事だけで価値あるものと思います。もしなくなっても、いろいろな人との出会い、声を届けてくれてありがとう、と感謝の気持ちでいっぱいです。

他と比べてではない幸福感

横浜市

私が入会したのは、1996年（たぶん）、上の子が4歳、下が2歳の頃でした。私もまだ30歳になるかならないかです。事務局は神楽坂そばの駄菓子屋の角を曲がって、魚屋のある路地に面した横寺町の幾代さん宅でした。事務局スタッフの川崎さんと篠原さんがいつも暖かく迎えてくれたことを思い出します。

しばらくして篠原さんが引っ越すと言うので代わりに私は、事務局スタッフにしてもらいました。川崎さん井上さんと事務をやっていました。事務局は会員の出入りもあり、電話も取るので、この間随分多くの個性溢れる愛すべき会員の人たちと出会いました。

1年半後、夫の転勤で名古屋に引越し、事務局スタッフはできなくなりましたが、会報編集などを続けていました。また、名古屋のメンバーと夜の会を重ね、WeDoのメンバーと月1度のレポートや年1度のお泊りなどで交流してきました。世代の違う会員とも、同世代で同じくらいの子を持つ会員とも出会える場が、どれほど私を力づけ、近視眼的な子育てから救ってくれたか…と、この8年に出会ったあんふぁんての皆さんに心からありがとうという気持ちです。

また、「あんふぁんて・としま」主催の講座がきっかけで自費出版ながら1冊本を書くことができました。本ができると、また次の本の話が舞い込みました。2冊目が出版されたことで、できるところまで執筆活動を続けようという気持ちになっています。前川ヨウという旧姓を用いた筆名まで付けてしまいました。この2冊の本ができるまでもできてからも、どれほど、あんふぁんてを通して出会った友人に励まされ、協力してもらったことかと思います。

仕事だ、家事だ、子育てだと、つい分けて考えてしまいますが、私にとってあんふぁんてで得た友人は、どの年齢の人であっても、仕事仲間でもご近所の主婦友達でも子どもの幼稚園や学校の友達でもなく、ましてや夫の関係者でもありません。仕事の話も家事の話も子育ての話も、夫の話もでき、私の一部ではなく全人格と交流してくれる人たちであることが私にはうれしいです。

ひとつの人格を持ったてくれる別の個性を持った人格…そういうステキな出会いは、お金を出したら何でも手に入りそうな今の日本でも、そうそう手に入らないでしょう。きっとみんなほしいはず。でも、そのほしいものがCMになってないからわからないようだけど「私はあんふぁんてからそれを得ましたよ」と自慢気に思います。この自慢、他の人が得てないからうれしいんじゃないですね。得ていない人にも是非、味わってほしいと思う類のものです。

他人と比べてではない、幸福感っていいですよね～。私は、それをあんふぁんてで得たと思います。

読むだけ会員だけど

三鷹市

いまはもう“マル高”などとは言われなくなりましたが、事実上39才という比較的（？）高齢で出産した私。何しろ初めてのことだったので、不安がいっぱい。そんなときに昔からのあんふぁんての会員である義姉があんふぁんての会報を持ってきてくれました。それ以前からあんふぁんてのことは話しに聞いて知っていましたが、実際に自分のこととして身近に感じて読んだのは、これが初めてでした。そして約6年前、出産しあんふぁんてに入会。

音楽を職業としている私は、入会してまもなく赤ちゃん連れで参加できる“小さな親子コンサート”を会員の皆さんの力を借りて開きました。場所は神楽坂にあった旧あんふぁんて事務局。緑に囲まれた別荘のような素敵な家で、赤ちゃんを抱っこしながら聴く人、寝転びながら聴く子ども…と、アットホームな小さなコンサート。私がバイオリンを弾き、私の姪が歌を歌いました。

その後、書道のワークショップに参加したりしたのですが、普段は会報を読むだけのことが多く、あっという間に6年経ってしまいました。でも、根本的にあんふぁんての多くの方が感じていること、問題に思っていることが、私の中にもあり、現在は子どもの保育所、学校・学童問題、憲法を守る会、自衛隊派兵反対、イラク戦争反対：など、地域住民や子どもの保育園の親同志と一緒に取り組み、日々バタバタと過ごしています。

『あんふぁんて』終刊のご挨拶

あんふぁんて事務局

１９７５年３月に新聞の投稿欄からスタートした「あんふぁんて」は、おかげさまで今年３０周年を迎えました。そして会報『あんふぁんて』も、今回の２００５年 2･3 月合併号でちょうど３００号になりました。これだけ長く続けることができたのは、多くの方々の応援があったからだと思います。本当にありがとうございました。

しかし残念ながら、会員数の減少や個々の会員の状況の変化などもあり、今の「あんふぁんて」には今後も今までと同様の活動を推し進めていくだけのエネルギーがありません。会のあり方や継続の方法などについて会員間で話し合いを続けてまいりましたが、その結果会報は３００号でひと区切りし、終刊とさせていただくことになりました。

今回の最後の会報は、３０年間を振り返りつつまとめた３０周年記念特集号。限られたページ数ではありますが、今までの会としての活動記録とともに、会員ひとりひとりの生き方や会との関わりを記した充実したものとなっています。ぜひじっくり読んでいただければと思います。

皆様方におかれましては、今後一層のご活躍をお祈りしております。何かございましたら、事務局までなるべくＦＡＸかＥメールでご連絡をお願いいたします。長い間のおつき合いを、ありがとうございました。心より御礼申し上げます。

なお、「あんふぁんて」の会としての活動は９月末まで継続する予定ですが、それ以降のことは未定のため、会報『あんふぁんて』と交換で会報や通信を送ってくださっていた団体や施設の場合、３月か９月末までで送付を打ち切ってくださって結構です。また、『あんふぁんて』を有料で購読してくださり３月末までの購読料のお支払いがまだの団体や施設の場合は、お手数ですが３月末までにお支払いをお願いできればと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

２００５年２月１４日

あんふぁんて　スタッフ一同

人間関係の温度差がつかめた

豊島区

年子の子どもを抱えて苦しんでいた。一人が泣いてうんちをすれば、もう一人は「それが汚い」ということもわからずに、何だろうと触りに近寄ってくる。それを止めたり、掃除をしたり…。そうしていつのまにか夜が来て、朝が来て、子育てに追いかけられていたあの頃に「あんふぁんて」と出会った。

それまでにも公園や児童館、育児サークルと覗いて回っていた。だが、その集団のピラミッド構造に絡め取られることがいやで、いつも1回こっきりだった。「あんふぁんて・としま」主催の講演会に行ったのも、その延長線上だ。

ここにも「おつぼねさん」はいるかしら…、いたらさっさと逃げだそう。いつでも様子を伺って、逃げる体制。見ると、おお、一家言ありそうなおネエサマ達がソロソロと…と思ったのは、実際にひとこと会話を交わしてみるまでだった。

「あんふぁんて」では、私が言ったことに共感してもらえる。意見を押しつけるのではなくて、対等に会話をしてくれる。こんなことをやってみたいと相談したことを、応援してくれる…。入会してからイベントのチラシ作成や会報の編集等々、様々なことをお手伝いさせてもらってきたが、どこでもそうした「対等な意見交換」が行われていた。人が出会い集まって話して、企画がよりよく練られていく。集団の中で、より良いものを作るために"我慢して付いて行く"以外の私に出来ることがあった！ 思えば小学生の頃、クラスメイトを頭の中で順位付けしたりしていた私にとって、「集団生活」というのは「服従と忍耐の構造」でしかなかったが、「あんふぁんて」では違った。それは、生まれて初めての経験だった。

その最たる物が、同じ幼稚園に子どもを通わせているお母さん同士の中で、幼い子どもが殺害された「音羽事件」の被告主婦に、事件後カウンセリングをして意見書を提出した先生の、講演会を開催したことであった。あれもあんふぁんての事務局で、私が「気になって気になってしょうがないんです」と話し始めたら、「さんは、そのカウンセラーの先生を招いて、講演会を開けば気が済むんでしょ？」と、アドバイスをもらえたことがきっかけになって動き出した。

それからは資金を抽出するために、助成金を申請するための書類の書き方を教えてもらうことから始まって、講演会当日の子どもの保育まで、事務局に助けてもらえたからこそ実現出来たことだった。

そして、そのとき講演会を実現させ得たもうひとつの力というのは、私と同じように事件を気に掛けている仲間との出会いだった。よりよい会にしたいという気持ちを持って、その仲間（スタッフ）とディスカッションを重ねていく。FAXの応酬や資料類で、2冊のファイルがパンパンに膨れあがった。これは私の宝物である。

そうやって講演会が開催できた後、私には私の、あの事件に対する答えが残った。それは「人間関係すべてに完璧を求めないこと」である。すなわち「挨拶する程度の関係」と「興味があることを共にやる関係」は、掛ける時間もエネルギーの配分も、またそこから得られる結果も違うのだということが、ようやくわかったのだ。同じ興味を持った人同士が（しかも、主婦同士でなくてもいい、老若男女が集まればいい）、そこにこそエネルギーを掛けると、よりよい物が生まれる。表面的な関係は、表面的な関係で割り切ること。完璧にうまくやらなければと思うと焦る。

これは「あんふぁんて」を通し、手応えのある人間関係作りを体験できたからこそ、自分の心の中でようやく整理が付いたことだ。ご近所づきあい程度の関係との、対比というか、温度差がわかった。「音羽事件」の被告の主婦の、心の重しの一つであったであろうそうした関係から、私は肩の力を抜くことが出来た。

今、私は子どもたちにも「学校のお友達と仲良くやりなさいよ」とは言ってない。それよりも「自分の好きな物・興味のあることに飛び込んで、そこで仲間を見つけなさいよ」と伝えている。「あんふぁんて」で学んだ人間関係のダイナミクスを、子ども達にも体験してほしいと思っている。それがわかってこそ、「同じクラスのお友達関係」との温度差もわかってもらえると思っているから。

自分の胸のうちを書くことから

大阪市

作文のお題を頂きました。「あんふぁんて」に入会させてもらったのは、子どもが1歳になる少し前だったと思うので、今年で11年目の会員なんですね。あっという間の年月は、ほぼわたしの30代と重なります。

初めて投稿した手紙が掲載されたときは素直に嬉しかった。子どもの世話にだけ明け暮れる閉塞感にもがいていたあの頃。育児サークルなんていうのもほとんどなかったし、子どもと共にどこの集団にも属さず、家に居ることが中心の生活でしたから、「公」の領分はほとんど皆無になってしまっていたのです。拙いながらも、自分の思いを綴ったものが活字になることに喜びを感じました。大げさなんだけど、「ああ、わたしの気持ちが、陽のあたる場所に置いてもらえた…」、そんな感覚でした。

ほどなく、大阪方面の方々と定期的に交流の時間を持つようになりました。乳幼児を抱えてのお喋りタイムはいつもあっという間。でも、楽しかった！ 喋り足りない分は、「紙に書きあう」ことで補いました。文字どおり「書きまくり」ましたね。「自分の胸のうちを書く時間＝深く静かに内面の没頭できる時間」を作るために、子どもにはなるべく長く昼寝してもらいたくって、午前中にしっかり遊んでもらう。そんなふうに1日がうまく流れてくると、子どもとの日々にも張り合いが持てたものです。

その後、あんふぁんての紙面で特集を組ませてもらったり、それがきっかけで「WeDo」というグループ活動を立ち上げることになり、そこでは更に熱く熱く、「仕事とわたし」をテーマに思いを綴りあったのでした。熱すぎた故、感情がこじれたり、批判的な指摘を頂いたり…などなどありましたけれど、それらは全て、今のわたしへの糧になっています。

紙での交流だけでなく、お泊り会も何度かありました。帰る時間を気にせずに、夜通し喋って、食べて、にぎやかでしたネ。宿や食事する店の手配をして下さった方々へは、ここに改めてお礼を申し上げたいです。

あんふぁんてを通して知り合えた方々、11年間お世話になった事柄は数え切れず、ここでは語り尽くせないほどですが、全てに心から「ありがとう！」の思いです。

さて、過去を振り返るばかりでなく、2004年にも、少し、思いを馳せさせて下さい。これを書いている今年、外面的には地味な1年でありました。

集中持続力も短くなってきていることを感じます。しかも、一定の時間でこなせる事柄が減退しました。もしかしたら、能力という点ではさほど変化していないのかもしれない。けれども、自己評価が低下しているのです。「もっとやりたい、できるはず」「いや、この程度だわ」。この二つの思いが常に葛藤しています。で、時折過激に集中して物事を進めると、あとで偏頭痛なんかがドッと押し寄せてくるんです。しかも直後ではなくて、数日後に逆襲されたりするので、身体って侮れないなぁ…と思います。

そんなわけで、適当に休みながらぼちぼち歩いているところです。8年越しの恋愛関係を卒業して、気がつくとお江戸まで日帰りお芝居鑑賞なんてこともしちゃった1年間でもありました。

どうでもいいことはますますどうでもよくなり、気になることへの固執は偏狂的になる。これって、もしかしたら老化現象への一歩なのかもしれません。心の中は、オッカケ愛で活性化されているので、それが表情やお肌の艶に表れてくれるとウレシイんですけどネ。

地震か、イラクか、隣国か。10年先はおろか、5年先も3年先も見通せません。子どもとのバトルな日々に追い打ちをかけられながらも、夢を追えるうちは走りたい、などと相変わらず、流れに身を任せるばかりのヘタレなのでございます。

会員の幅の広さが魅力

武蔵野市

生後8ヶ月の長男を連れて、東京から夫の転勤先の岩手県盛岡市に引っ越したのは8年ほど前のことだ。

それまで働いていた職場を退職し、地方でのんびり子育てをするのもいいかもしれないと思っていた。このまま同じ仕事をずっと続けていけるのだろうかと疑問も湧いていたときだったので、仕事への未練よりも、新しい家族と新しい生活をすることへの期待の方が大きかったと思う。

しかし実際引っ越してみると、知り合いもいない、気候も違う場所に昼間赤ん坊と二人だけで過ごすことにため息が出ることもあった。もちろん、ベビーカーを押して地図を片手に毎日街や公園を歩き回るのも気持ちよかったし、楽しいこともたくさんあった。

でも、ずっとこのままなのかなあという不安は徐々に大きくなっていった。自分が望んだ生活を十分楽しめていないというのもショックだった。私はもっとポジティブな人間のはずなのに、と。パートに出ることも考えた。でも、いろいろ考えて尻込みしてしまう。なぜ私は踏み出せないのか、また悩む。今の私は仮の姿だ、と思い込むことでなんとか保っていた。

あんふぁんての名前は、会員だった知人から聞いてはいた。読んでいた本にもあんふぁんてのことが出てきたので、そうだ、ここに入会してみようと決めた。

会報が届くと、むさぼるように読んだ。特集記事や多くの投書に、子どもも大事だけれど、自分も大事だという考えが表れていて共感した。もっと関わってみたいと思い、事務局に連絡して投書のワープロ打ちのお手伝いをさせてもらうことになった。これは予想以上に面白い体験だった。とてもあっけらかんとした人もいれば、かなり深刻な事情を抱えた人もいて、ワープロで打ち直しながら、その人の声が聞こえてくるようだった。

引越し先で仲良くなった人たちもいたけれど、なかなか内面に踏み込んだ話ができるまでにはなれない。あんふぁんてでは、ここに所属しているという連帯感で、自分をさらけ出せるような気がした。

当時盛岡には私を含めて2人しか会員がいなかった。その方に連絡をとって、一緒に特集を担当した。お互いの子どもの年齢は違ったけれど、やはりあんふぁんて会員ということで話題が広がり、楽しかった。インターネットを使えるようになると、今度は遠方の会員に声をかけて特集を担当したのも面白かった。本当に、あんふぁんてがどれだけ支えになっていたことか。

それから長女が生まれ、長男が幼稚園に通うようになり、地域での交友関係も広がってきた。それでも「いつ、どんな形で再就職するか」という問題は常に頭にあり、資格試験の勉強をしたりしていた。何かやっていないと不安で不安で仕方なかった。一方では、割り切って（いるように見えただけかもしれないが）子育てに没頭している友人も、その潔さがまぶしかった。

そのとき、あんふぁんて会報の「WEDO女と仕事を考える会」の文字が目に飛び込んできた。すぐに入会。ぐちゃぐちゃとした思いを、毎月のレポートにぶつけて今に至っている。そして3人目の子が生まれた直後に夫が東京に転勤になり、5年間住んだ盛岡を後にした。昨年は念願の再就職をした。

あんふぁんての大きな魅力は、会員の幅の広さだと思う。地域的にも年齢的にもそうだが、あんふぁんてに入っていなかったら出会えなかったと思えるような個性豊かな（一風変わった！）メンバーが多い。自分の子どもがとっくに大きくなってしまったという会員の方とも、ここで出会ったということで大きな連帯感が生まれる。東京に来てからイベントにも顔を出せるようになって、ますますそれを実感する。

今は忙殺される毎日を送り、以前ほどあんふぁんてに関われなくなっている。でも、いろんな人の人生のいろんな局面を、あんふぁんての仲間が理解し応援し合っているのを感じる。おそらく多くの会員がそうやってあんふぁんてとつながっているのだろう。

それから先日ある男性に「女の世界って大

変でしょう？」と尋ねられ、とっさに「全然。女だけの世界、好きだから」と答えた。これは本音だ。性別役割なんかを気にしないで女だけで何かに取り組んだり話したりっていうのも楽でいい。そういう場を持っていたい。

私にとってのあんふぁんては、無理せず、縛り合わないで付き合える、でもやっぱり強い心の支えになっているという存在だ。この先、あんふぁんてがどんな形になろうとも。

あんふぁんてに助けられた私だが・・

さいたま市

長男の育児に追われていた頃、あんふぁんての会報の到着が待ち遠しく、2度3度と繰り返し読んだものだった。でもあの頃の方が、わずかでも良いから自分の時間を持とうとひたむきに努力していた気がする。東葛あんふぁんてのメンバーと考現学のFAXを互いに交換していた一時期は、毎日の生活を見つめて人にわかってもらえるよう文章にするという作業を、多忙な毎日の中でも続けていた。たまに読み返すと懐かしい。

この秋からパートの仕事を始めて思ったのだが、人間どんな状況にあろうと自分のやりたいことは優先し、やりたくないことはやらないのだ。娘が学童に入れないため、週2日保育ママさんに自宅に来てもらうので、私にとっては掃除が目下第一の優先事項。お願いしている保育ママさん達は、2人とも50代。1人は元幼児教室の講師、もう1人も元児童館職員で、心底子ども好きな人達。いい加減な母親の私よりよほど頼りになる。4年生のお兄ちゃんまでママさんに会うのを楽しみにしていて、学校から走って帰宅するほど。家族の中で完結して息苦しくなるより、他人に助けを求めてしまった方が親子ともども楽なのかも。子育て中の友人同士でそれができれば理想的だが、埼玉に越してからはそういう友人に会えなかった。でも、年代が違う方が私も素直に受け止められる面もあり、これはこれで良かったと思う。

昨年から始めた空手も、週2日平日夜6時半から8時まで稽古しているので、正直ふらふら。最近は稽古にただ行くだけ状態なのだけど、やらないとどんどん忘れていくし、体を動かすことでしか得られないものもあることをこの年で初めて知ったので、やめられない。

あんふぁんての活動の担い手がないというのも、理由はどうあれ、会員の多くにあんふぁんての活動がやりたくない方に区分けされてしまった結果なのだと思う。

事務局に顔を出していて一緒に活動をした仲間とは、卒直に（遠慮がなさすぎるくらい）意見を出し合うことができた。こんなことやってみたいというアイディアが出た時、経験豊かな会員の面々から具体的なアドバイス&タイムリーな助力を得て、イベント実行までこぎつけることができたし、事務局に託児ボランティアを紹介してもらった時も、会員のベテラン保育者に少ない謝礼で集まってもらうことが出来、又カンパの協力も得て、資金面での大ピンチを切り抜けることが出来た。

イベント実行メンバーとも何度も会って打ち合わせし、直接関係ないような話題を交わしているうちに、自分の抱える悩みが少し軽くなったように思う。

特に私の場合は、親の自分に対する執拗な依存に気付くことができた。（今となっては、何十年も気付かなかったことが恐ろしい。）真に愛された経験に乏しい者は、執着してくる人間にしがみついてしまうことも、身を持って実感。また、その悩みを聞いてくれる人を得たことで、自分自身少し変われたと思う。

残念に思うことは、やはり会員同士お互い会って話し合うチャンスが少ないこと。会話しているうちに良いアイディアが浮かんだり、より深く問題を理解することができるのに、と思う。

これからも私は

豊島区

詩人になりたかった主婦が
あんふぁんての会員になった
自分の意志
自分の意思
私が
わたくしが
わたしが
決める
止める
立ち止まる
歩む
走り出す
自分が主人公のあたり前のことが
誰かさんの配偶者であり
誰かさんの親であり
誰かさんの娘であり
保護者や患者やエトセトラになると
ちょっと息苦しい

あんふぁんては
子連れで行けて
子どもを置いて出かけられて
他人の子どもや赤ちゃんを
抱っこできて
おしっこに連れていける

保育されてた娘が
いつの間にか保育者になり
一緒に遊んでる
不思議なところ

へそ曲がりと言われた
高校生のころの私を連れて

変わり者と言われた
大学生のころの私を連れて

気がきかない嫁と言われた
新婚時代の私を連れて

私の生んだ
二人のじゃじゃ馬オテンバ娘を連れて
あんふぁんてになったら

すっぽりと
あんふぁんてに包まれた
だから
ずっとずっと
あんふぁんてな私でいたい
ハテナと思うことを
言葉に出してみたい
イカッテいることを
他人に知ってもらわなくても
平気でいられるから

人を分かろうと思っていないから
人から私がどう思われようと
かまわない

暗くて
意地悪な
私の性格を
私自身が
よくわかっているから

一人で行動する
楽しさと

集団の中での
自由の見つけ方が
あんふぁんての中で
発見出来た

あんふぁんてに入らなければ
知りあいになれなかった人達

あんふぁんてに入ったら
知りあいになれた人達

出会いをくれた
あんふぁんて

歩む線路をのぞかせてくれた
あんふぁんて

いつも　私が
いつも　私と

これからも
私は
あんふぁんての会員
そう決めた!!

書くことで心の整理ができた

神戸市

私があんふぁんてと出会ったのは、上の娘が1才を過ぎた頃、新聞の記事がきっかけでした。当時、引越してきたばかりで知り合いもなく、夫の帰りは遅く、いつも娘と2人きり。記事の中に「密室育児」という文字を見つけた時、まさに私のことであり、ここならば私の気持ちをわかってもらえるかもしれないと思ったのを覚えています。

東京にいた時は、子どもを連れて事務局に行ったり、特集をさせて頂いたり、私にしては、まめに動いていました。そこで何よりもありがたかったのは、1才半を過ぎても歩かない娘のことを誰も「どうして?」とか「まだ歩かないの」とは言わなかったこと。これがあんふぁんてのよいところ、好きなところでした。

鹿児島に行って、下の子を極小未熟児で出産した時は、誰かにその事を聞いてほしくてお手紙を書きました。振り返ると、私はいつも何か事が起こるたび、あんふぁんてに手紙を書いていたように思います。それが会報に載ろうが載るまいが、書くことで自分の考えが整理でき、その状況を冷静に見ることができたからです。

けれども、95年の阪神大震災の事だけはどうしても書けませんでした。すごく聞いてほしいのに、あまりにもいろいろなことがありすぎて、何も書けなかったのです。その後連載のお話を頂き、長い時間をかけて、私は震災とその後の生活にしっかり向き合い、それを乗り越えることができたように思います。書くことによって、救われたと強く感じました。

その後も我が家は波乱含みで、平隠無事とは程遠い生活を送っていました。が、私はあんふぁんてにだんだん手紙を書かなくなりました。現実の生活にエネルギーを奪われ、その現実があまりにも重く、文にする余裕がなかったこと。そして、その状況が少しでも変わるような答えがほしくて、カウンセリングに通うようになったこと。手紙を書くという一方通行では、もの足りなくなったからかもしれません。書きたい時だけ勝手に書いて、必要でなくなったら、読むだけ会員になってしまった。そんなわがままも許してもらえると甘えていた結果が、300号終刊になったのかもしれないと後悔しています。

震災から10年。今、生活は少し落ち着き、昨年から仕事も始めました。あんふぁんてに助けられ、励まされて、今の自分がいる。感謝の気持ちでいっぱいです。そのことを忘れず、また進んでいきたいと思います。

「書く」ことに親近感

品川区

あんふぁんてに入ったのは5才の息子が生まれたばかりの5年前。育児そのものよりも仕事を辞めた、という状態に慣れないでいた頃でした。近所に知り合いも少ないし、どこかのグループみたいなものに入っていたほうが安心なのかなあ、でもちょっとおつきあいが億劫、と思ってたところに会報中心の会らしい、ということで入ってみました。最近会報をちゃんと読めていない月もあるのですが、WeDo（あんふぁんて会員有志で作る、仕事を考えるグループ）に入っていてこちらのレポートは毎月楽しみにしています。

「最近の母親は子どもの健診にきても携帯メールばかりやってる」という批判を聞いたことがあるのですが、子どもができてからのメール（携帯ではなかったけど）は貴重でした。子どもと一緒のくらし、というのは全体が「ひらがな・パステルカラー・くまさん、うさぎさん」的ムードになってしまい、自分をマンガの中に描いてみるとふきだしからひらがなばっかり出てるようなイメージがありました。友達とのメールのやりとりの中で、漢字に変換できる瞬間がなんとも快感だったのです。

まわりを見渡してみると、「書く」ことを負担に思う人も少なくないですよね。書くくらいなら電話で話しちゃう。あんふぁんてやWeDoのメンバーなどは「書く」ことが私同様好きなんだな、と感じそれだけでも安心感があります。

本音で話せるのはうれしい

朝霞市

300号とはすごいと改めて思います。あんふぁんてを人に紹介するのに会報を見せると、しっかりと出来ているわね、と殆んどの人が口にします。

あんふぁんてに入会したのは9年前の、長女が4歳になった頃です。長女が6ヵ月位の頃、一度あんふぁんてに問合せをしたものの、別のサークルに入ってしまいました。離乳食やトイレトレーニング等のすぐ身近な話題が欲しかったからです。でも、そのサークルも数年で解散になってしまって…。地域が限定されていると引越しすると離れてしまうし、子どもの身近な話題だけだと子どもが大きくなるにつれ、話題もつきてしまいます。でもあんふぁんては違います。子どもだけでなく、大人の話題も沢山！もっと早く入会しておけば良かったと後悔しています。

長女が1歳半から4歳になる直前まで滋賀県大津市に主人の転勤で居住しました。その時に育児やママ友達関係の悩みを、本音でいろいろ話せる仲間が身近に居なかったのはつらかったです。その時に関西方面の会員の方々ともお会い出来てたら良かったのになぁ…。でも、人と人との出会いには縁と時期があるのだからと、前向きに考える様にしています。

その後東京に戻り、中野区を経て朝霞に来てもう8年。朝霞に引っ越して来た時、市内の会員にすぐ連絡をとり、今も連絡を取り合っています。中野区にいた時に、松戸から中野に引越して来た会員さんがお葉書きを下さりました。互いに会いたいですねと言いつつ、実現しないまま、年中児だった子どもがもう中学1年生になってしまいました。

私も40代前半。30代とは違う自分がいます。素敵に歳をとりたいです。あんふぁんてには魅力のある人、パワーのある人が一杯。皆、何かキラリと光るものを持っている。あらっ私は持っていないわなんて言う人、自分で気が付いていないだけです。

本音で話せる人がいるのは、やはり嬉しい事です。今までの様な会報が出なくなっても何らかの形でつながっていたいです。あんふぁんてにありがとう！です。

広がる人間関係

荒川区

私があんふぁんてに入会したきっかけは、ひとに誘われたからでした。それまでの子育ては、たいへんだったことはもちろんたくさんありましたが、夫の両親と同居でさらに自営業のため、助けてくれる人が24時間いつもそばにいてくれたので、問題を解決できていたのだろうと思います。また、自分の人生というかやりたいことについても、多分そのときの私のやりたいことが子育てだったような気がします。だから子どもがいるから自分のやりたいということを我慢していて、ストレスがたまるということもなかったのだろうと思います。それとも子育てに精一杯で、回りを省みる余裕がなかっただけなのかもしれませんが…。そんなわけでそれまでの私は、あんふぁんてとは全く無縁の生活だったわけです。

そんなわたしがあんふぁんてに入会したからといって、自分から何か発信することもなく、ただ会報を読むだけ、誘われたイベントに参加するだけの会員でした。それでも時々あんふぁんての事務局に行くこともあり、会報作りにかかわることもありました。それもきっかけは誘われたからだったのですが、そのおかげで新しい人間関係ができたり、知らなかったことを調べるきっかけができたりしました。「あんふぁんてってちょっとおもしろいな、ちょっといいかも…」と感じました。

ここにきて、時代の流れとともにあんふぁんての存在意義も、あんふぁんてが発足したころとはまったく変わってしまいました。30年の歴史をもつこの会が岐路にたっている今、原点にもどり一度会を解散したあと、あらたに今の私たちが作りたい会をもう一度結成できるといいかなと感じています。30年の歴史はそんなに簡単に作れるものではなく、いままで活動の中で築き上げてきたものが解散とともになくなってしまいそうで、それはとても残念な気もするのですが…。

今、これまでのあんふぁんてを一度清算して、新しく「あんふぁんて」できるといいなあと思います。

あんふぁんては私の一部

川崎市

私があんふぁんてとつながったのは、7年近く前、夫の転勤で三重から神奈川へ引っ越してきてまもなくのことでした。

当時、1歳後半の娘と4歳になったばかりの息子。子育てに疲れていた私。年に何度もあんふぁんての集まりに出席し、あんふぁんての存在に救われました。あんふぁんての何が、どう、私に影響したのか、言葉で表現してみようと思いましたが、正確に伝えることは不可能だと思い、やめておきます。

ここ2～3年、会報を読むだけの会員になってしまいましたが、あんふぁんての存在は今の私の一部で、おかげさまで、現在私はハッピーです。

あんふぁんての存在に感謝！あんふぁんて、大好き！どうもありがとうございました。

必ず仲間はみつかる

船橋市

現在中学1年生の息子が、生後4ヶ月のときに入会。育児用品メーカーの正社員として育休中だった。復帰についてさんざん迷ったあげく、育休満了と共に退職。その後のアルバイトとして働いた4年間と、育休中にあんふぁんての集りに参加することでエネルギーをもらった。ここ数年は、地元の会計事務所でフルタイムの仕事に就き、なかなか集りに参加できなくなっている。一方で、思春期の息子とどう向き合っていくか、人生の軸足をどこに置くか再び迷いに入り込んでいる。

出産までは、頭の中は突拍子もないことをいつも考えていながら、今にして思えば、表面上はどうにか優等生として過ごしてきた。判断に迷うことはあっても、誰か自分の信頼できる人の意見との一致を確認することで安心して動いてきた。しかし、産後の生活と育児はそうは行かなかった。

まわりの誰もがよかれと思ってアドバイスをくれるが、自分の考えと一致しない。母乳育児へのこだわり、育児・家事・仕事のバランスなど…。産後のホルモンの関係か、妙にすべてに真剣で、その時決めるひとつひとつに一生が関わるような気持ちだった。（もちろん、仕事のようにその後の人生に大きく関わる判断もあったけれど。）育児に疲れていたくせに、力を抜くということができなくなっていた。いつも力んでいたら、ここぞというときに集中できないのは明らかなのに。力点のポイントが定まっていなかったからか、疲れていたからか。

そんな時に出会った「あんふぁんて」。当時住んでいた江東区から中野の女性会館まで乳飲み子連れで参加した。川崎さん、中里さんはじめ、みんなの話が面白かった。「仕事に復帰しても、はじめの1年は子どもの病気で、職場で使い物にならないと思っていた方がいい」ことや、上田紀行著『覚醒のネットワーク』を教えて頂いた。この本がきっかけで、出版社「カタツムリ社」社長だった加藤哲夫さん、「教えない教育」を提唱し「すくーるらくだ」代表の平井雷太さんと出会い、「考現学」なるものを5年近く書いた。昨年から今年にかけては、松岡正剛氏が主宰するネット上の学校「編集学校」で学んだ。

あんふぁんて20周年記念イベントでピアノトリオを演奏させてもらったチェロは、弦楽合奏団に参加を続けている。声がかかれば、ピアノとの演奏もしている。これは、記念イベントで演奏したことがスタートになっている。

入会してすぐの「来期案アンケート」集計、保育園特集、チェロの演奏、どれもが、できるかどうかわからないまま、とにかく話を受けてやってみた。やってみれば、意外とできるというか、エネルギーが出てくることを学ばせてもらった。

ある場所で手を上げてみて、仲間が見つからなくても、もっと広い場所で何度も手を上げていれば、必ず話の通じる仲間は見つかる。このことも、公園では友達を作れなかった私が、あんふぁんてで学んだことだ。

都内での集りに参加したときに、「地元でちょくちょく会えるつながりができるといいね」と滝口さんにアドバイスをもらったことは、「東葛あんふぁんて」で月1回集まるようになってそのとおりだと実感した。今では年2回程度、食事会をしている。それぞれのちがいを受け入れることのできる仲間を面白く思う。

これからも、あんふぁんて精神？をもって行けば、なんとかやっていける気がしてきた。

あんふぁんての魅力

豊島区

あんふぁんて30周年、おめでとうございます。気がつけば私も、会員歴は10年目に突入です。10年！入った当時そういう人がいましたが、10年だなんてすごいなぁとただただ感心していたのに、今は私がその立場。何だか不思議な気分です。20歳を過ぎるとあっという間に時がたっていってしまいます。1人目の赤ちゃんの時入会しましたが今はその後2人生まれ、3姉妹の母です。下2人は自宅で産んだのですが、そういえばその時のことを会報に書いたなぁ、と思い出しました。

子どもを産むととたんに物事がスムーズに運ばず、思い通りにいかないことだらけ。家事をするのもまとまった時間ではなく、こま切れの時間。初めての育児。子どもとほぼ2人だけの生活。産む前は想像もしていなかったことだらけ。生活に手一杯の状態に新たな光をさしてくれたのが、あんふぁんてでした。

あんふぁんてとの出会いは、上の子が7ヶ月の時でした。乳幼児家庭学級という区で開催された10回ほどの講座に参加したところ、当時事務局をされていた方もちょうど講座に参加されていて、そこであんふぁんてのちらしを配っていたため存在を知りました。ちらしをみても、あんふぁんてって何？と実はよくわからなかったのですが、でも興味がわきました。とりあえず会報の発送作業に来てみたら？と誘いを受け、軽いのりで早速発送作業の手伝いに赤ちゃん連れでおじゃましにいきました。

今まで昼間赤ちゃんと2人だけの生活で、悶々としていた私にとって、大人の会話はきっと久しぶりだったのだと思います。パワフルさにも圧倒されました。そして雰囲気が気に入って即入会したのでした。

あんふぁんては、自分が何かやりたいことがあったらいかせるところ。リーダーみたいな人はいない。あんふぁんて歴が長い人も昨日入ったばかりの人でも、発言権は皆同じ。ピラミッド組織じゃないから、上の意見をただ聞くとか、意見が言えないとかはない。みんな対等な状態、というような感じで聞いたような気がします。長年続いているのも惹かれるものでした。長いものが好きなのです。

発送作業などお手伝いしたせいか、あんふぁんてがより身近に感じた気がします。自主保育というのを知ったのもあんふぁんてから知り得た情報で、お陰で幼稚園・保育園以外にも選択の余地があることを知り、長女が年少の時、預けあいの自主保育をしているサークルに入ってました。小学校に入るときは就学時検診のことを知り、悩んだのですが結局受けさせず、2人目も受けさせず、3人目は2年後に控えた状態です。

特集メンバーになったり、お茶会にも参加させてもらったり、トライアルで子どもを預けてランチに行ったときのことも懐かしく思い出されます。いつでも本音で語り合えるところ、すごくいいなと思います。

専業主婦でどっぷりつかっていた私でしたが、ちょぼちょぼと仕事もするようになってきました。10年後、20年後はどうなっているのでしょう。楽しみです。

私が私であるために

豊島区

10年前、友人から会報を見せてもらったとき、内容はみんなのアレが嫌だとか、これがどうのと愚痴ばかり一杯で、こんな事の何が楽しいのだろうと不思議だった。だって私は、いつもやりたい事をやりたいようにやっていたし、行き詰まったら手を引くなど、その時できることをすればよいといつも思っていた。

だから、いきなり事務局に行って「この会報つまらない」と川崎さんに言った。今考えると川崎さんは結構怒っていたかもしれない。でも私としては、私の単なる感想なのだから、別に悪い事を言っているとも思わなかった。そこで川崎さんからそれならあなたが創ってみればといわれ、そこから編集の手伝いが始り事務局の手伝いが始った。

もともと探究心だけは結構あるほうだったし、子どもも5才3才と2人いたので、主婦とは何ぞや？とともに《あんふぁんて》ってなんだろうと思い、ずるずる事務局に居た。子どもがいてもいなくても私は私。夫もその事に何も言わないし、私が結婚半年後にインド一人旅に出かけても「気を付けて言ってきて！」という位。そんな状況が当り前の私にとっては、大多数の主婦の人たちの中に入れば浮いていた事は確かだろう。あんふぁんてで浮かない方法を模索していたような気がする。

自分らしくいきる事を提唱しているあんふぁんてだから皆と同じようになんかしなくてもいいのだが、川崎さんからいつも「あなたのように自分の思うようにできる人ばかりじゃないのよ」といわれ、いつしかそれが解るようにならなければ、私にはそれがわからない、その足りないところを補おうとどこかで思っていたのだろうと思う。

基本的に人は1人で産まれ1人で死んでいくのだけれど、生きているうちにどれだけいい出会いができるかなんだろうなあなんておもっているから、その出会いをよりよいものにしようと、事務局でいろんな状況の人たちを理解しようと試みた。そうしているうちにだんだん自分というのもがなくなってきた自分を感じた。美容院に行ってどんな風にしますかといわれることが苦痛になっていった。自分の着たい洋服がよく解らなくなってきた。動き易くて目立たないものを探している自分が居た。

私は一体何をしている。これが主婦と言う物ならもうやめようと思った。この10年あんふぁんて事務局に居て学んだ事はたくさんあった。でもそれと引き替えにいつの間にか自分らしさをなくしてしまうという、本末転倒な事態に陥った状況だった。でもこれからは、少しずつ立て直そうと思う。あんふぁんてはきらいじゃないし、自分をなくして滅私奉公してしまったのは私の勝手なのだから、これからはそうならない方法を模索したい。私が私であるために、あんふぁんてしていきたい。

あんふぁんてが生きがいに

東都企画

あんふぁんてぁんて300回発行、おめでとうございます。振り返りますれば、昭和50年代後半神楽坂に事務所がある頃、古知さんがあんふぁんての原稿を持って見えられたのがご縁で、今日迄タイプ、印刷、製本の仕事をさせて頂いております。

当初はまだ手書きの原稿が多く、字の読みまちがえや、たて20字、横33行にタイプが納まらず苦労しました。そのため原稿用紙を印刷してスタッフの方にお渡ししたこともありましたが、原稿も見慣れてき又ワープロで原稿を出して下さるようになり、タイプ打ちが楽になりました。現在はパソコン＋タイプで、スタッフの皆さんにお世話になっております。

平成5年主人が食道がんで亡くなり、しばらく会社を閉めることばかり考えておりました。仕事仲間がタイプの機械を処分し、ワープロに切り替え、パソコンへと変化させて行く中、毎月必ず入稿して下さるあんふぁんて、又スタッフの皆さんの暖かいお気遣いに助けられ、タイプの仕事がある間は続けさせて頂きたいと願い、今年でもう12年になります。この間悲しい、さみしい時夢中でタイプを打っていると元気が戻ります。まさにあんふぁんては私の生きがいになってくれました。

本当に長い間タイプの仕事をありがとうございました。私も300回を区切りにタイピストは定年に致します。が、東都企画は続けていきますので、今後とも相変わらずよろしくお願い致します。

特集を終えて―種は蒔かれたか―

小平市

今回、無謀にも30年間の年表づくりを試みたのは、30周年イベント企画のミーティングで、全会報を分担しての総括作業が中途半端に終わってしまったからでした。その何分の一かでも、会員各自が振り返る材料を提供したいと、全会報と格闘。もちろん省略につぐ省略で、かなり独善的ではありますが、許してね。

また今回の特集には、かなり無理を言って書いてもらった方もいますが、前々号の矢郷さんから始まって合計55名からの文を編集していると、実にオモシロイ！　こんなにユニークでパワフルな人たちが集まっていたんだなあと、今さらながら感慨深いものがありました。会費を一度でも払い込んだことのある、「あんふぁんて」を通り過ぎて行った人の総合計は6927名。そのひとりひとりの中身の濃さを感じて、確実に種は蒔かれたのだと思えたことが幸せです。一旦閉じて、新たなつながり方を模索したいと思いました。

『あんふぁんて』終刊にあたって

発足30周年を迎えた「あんふぁんて」ですが、30年間発行してきた会報『あんふぁんて』は、今回が最終号（300号）となりました。

『30周年記念号』として会員・旧会員から原稿を募ったところ、あんふぁんての思い出を通じてそれぞれの人生をも振り返る熱のこもった投稿が寄せられ、30周年記念にふさわしい内容になりました。

また、活動の歴史を振り返るための簡単な年表も掲載してあるので、自分が入会する前の「あんふぁんて」の活動も含めて、30年間の軌跡をたどっていただけると思います。

★　★

記念すべきこの300号の表紙の担当は、会としてはじめて世に出した本『お産サイドブック―産んだ人から産む人へ』や最新刊『お産サイドブックⅡ』のイラストを担当してくれた、旧会員でイラストレーターのワダケイコさん。文中の沢山のカットを担当してくれたのは、仙台市の会員　　さんです。

★　★

20年以上もの長い間、私たちの誤字脱字だらけの原稿を根気よくタイプ打ちし印刷してくださった（有）東都企画の高橋さんご夫妻には、本当にお世話になりました。

特に、今回原稿を寄せて下さった（P41に掲載）奥様は、会員以上に会報の内容を読んでくださっていたと思います。この場を借りて改めて感謝の気持ちを伝えたいと思います。

（川崎）

今後の活動

預け合い保険の契約の切れる9月末まで「あんふぁんて」も会としては存続。会費も変更ありませんが、例えば、会報、イベントや集まり、会費や名簿などの事務関係、これらについても会員の皆からの提案待ち。今のところ決定しているのは有志による月1回の土曜サロンと会員通信2回分（詳細は未定）、4月21日（木）、6月23日（木）の事務局会議、8月23日（火）の決定交流会です。それ以外に何をどうしていくかは、9月末までの会員ひとりひとりの気持ちと行動力次第です。

事務局の部屋は当面借り続けることが可能。ただし、専従スタッフのいない無人事務局（留守電あり）となるため、迅速な対応はできません。会への連絡は、ファックスかメールでお願いします。

事務局までの地図

第３００号　（隔月５日発行）
２００５年２月５日発行
（１９７５年７月２６日初刊発行）

あんふぁんて　2·3月合併号

発行人
発行所　あふぁんて出版部

Tel・
定価　５００円
振替口座
加入者名　あんふぁんての会
ﾎｰﾑﾍﾟｰｼﾞｱﾄﾞﾚｽ

土曜サロン会場（幾代宅）

※第2土曜夜（6時～10時）。要ＦＡＸ予約。